
ISーインフィニット・ストラトスー黒い閃光

RAG

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS—インフィニット・ストラトス—黒い閃光

【Nコード】

N6935T

【作者名】

RAG

【あらすじ】

要するに、IS×ACというモノ。

作者は3P、LRP、4、fAをクリアしただけですが、「面倒が嫌い」などのACネタが多分に入ります。更にはいろんな所からネタを引っ張って来ます。

そして主人公は一夏とは別（ここ重要）。

「ネタ元を考える面倒が嫌いなんだ」や「オリ主を排除、排除、排除」という方はブラウザの戻りで「消えろ！イレギュラー！」してください。

オリキャラ設定 Ver. 2.10 (前書き)

- ・ 斉藤裕樹のレイヴン・リンクスネームの修正

オリキャラ設定 Ver. 2.10

さいとう
裕樹 ゆうき

年齢…15歳

身長…約180cm

所属…なし（IS学園を除く）

使用機体…・UN-100改「ハスラー・ワン」

新世代
ブラック・グリント
・ネクストIS「黒い閃光」

・AC「ラグナロク」

・AC-NEXT「ラグナロク？」 ツヴァイ

・AC-NEXT「ブラック・グリント」

レイヴン・リンクスネーム「U・N・Owen」（通称オーエン）

設定

・幼少期に人体改造され、「ヴォーダン・オージェ越界の瞳」を両目に保有するなど極めて戦闘技能が高い。
社会から完全に隠匿されている人型戦闘機械「アーマード・コアAC」を操る傭兵、「レイヴン」として戦っていたが、篠ノ之束の依頼により、ISの機体制御プログラム作成に協力。

その際に「ハスラー・ワン」のコアを受け取る。

・その後もレイヴンとして戦い続けていたが、数年前に突如として現れたアーマード・コア「NEXT」^{ネクスト}との戦争により

裕樹ともう1人のレイヴンを残して全滅。もう1人は消息を絶ち、裕樹が「ラストレイヴン」^{最後の1人}となった。

・その後、ネクストを駆る「リンクス」となり、BFFの「王」^{ワン}「小龍」^{シャオロン}や「リリウム・ウオルコット」、有沢重工社長でありリンクスの「有沢隆文」^{ありさわ たかふみ}、オリジナルの1人「霞 スミカ」であり、現オペレーター「セレシ・ヘイズ」、カレード及びORCAのリンクスらを味方に持つ傭兵となった。

・有沢重工製のグレネード等を好む。

その為、有沢重工の社長である有沢隆文とも関わりがある。しかし、王やリリウムはそんな事は気にしていない。

・ラグナロク？のアセンブルデザインの中には（その影響で）重4脚にOGOTO、SAKUNAMIを積んだの「4脚爆装」や、

重4脚にOGOTO、063ライフルと肩ASMサイルを積んだ「4脚高速戦タイプ」、

軽4脚に両腕・両肩にスナイパーライフルを積んだ「遠距離戦闘タイプ」などがあり、

有沢重工製品がほぼレギュラーナンバーと化しており、とてもカオスな事になっている。（それでも、恐ろしいほどに強い）

- ・改造を施された所謂「強化人間」である為、情報を瞬時に解析、機体制御に反映などを行える肩武器を飛行中にも使用可能。更には肩武器と腕武器を同時に操る事も出来る。

- ・前述の遠距離戦闘タイプで近距離射撃戦をやるなど、滅茶苦茶な戦闘もする。

その際はちゃっかり063ライフルを装備していたりする。

リリウム・ウォルコット

年齢…15歳

身長…約150cm

所属…企業連、カラード、GAグループ・BFF社

使用機体…ネクストIS「アンビエント」

- ・AC-NEXT「アンビエント」

設定

- ・BFF社の新女王としてネクスト「アンビエント」を駆るカラードランク2のリンクス。

・アンビエントの機体構成はネクスト・IS共に後方狙撃支援型との共闘を想定した
前衛型の機体構成となっている。

・企業連がIS事業に参入したことをきっかけにIS適性検査を受け、
その高い適正值からIS操縦者となった。

・銀色の髪に青い瞳。数ヶ月差ではあるが裕樹より年下である。

・一人称は基本的には「私」、親しい間柄ならば「リリウム」となる。
裕樹を呼ぶ時だけ「お兄様」と呼ぶ（時と場所をわきまえて）。

・王小龍の仕組んだ「クイーンズランス襲撃」時に
リンクス「U・N・Owen」こと裕樹と出会う。
その際に裕樹に一目惚れ、以来兄妹の様な、恋人の様な関係になる。

・使用する武装は殆どがBFF社製。
しかし、他社のパーツを使用する事もある。

・王小龍、有沢隆文共々裕樹がどのようなパーツ・武装を使用している
でも気にしない。

一重に裕樹の実力の為であり、下手に拘束して自社の新武装、新
弾種の

テストをして貰えなくなる事を危惧した結果である。

（リリウムの場合にはただ単純に気にしていない）

・裕樹の持つ「カッコイイ機体」の概念を理解できている数少ない女性。

その他にはエイルプール、フィオナ・イエルネフェルト、メイ・グリンフィールド、シャミア・ラヴィラヴィなど。

オリ機体設定 Ver. 3.20 (前書き)

色々変更

ネタばれ上等!!!!

オリ機体設定 Ver. 3.20

操縦者：斉藤 裕樹

UN-100改「ハスラー・ワン」

・UNは国連、1は第一世代型IS、
00は宇宙空間での活動を主眼に開発されたプロトタイプの
事。

なお、このタイプは元から全身装甲型である。
フルスキン

・見た目こそ第一世代機だが、ACの装甲・ブースター技術などを応用している為

第三世代型や第四世代型とも互角の勝負が出来る。

・ACの装甲技術（防護スクリーン）によって
エネルギー耐性が並みのISの10倍程高くなっている。

・AMSによる機体操作技術を併用している為、
思考した行動なども寸分変わらず再現可能。

・背部、肩部、腕部、腰部にハードポイントが設置されており、
換装をする事により様々な戦闘状況に対応出来る。

・各パーツごと換装が可能。（戦闘中も可能）

・腕部は「特殊装甲武装腕部」アーマード・ガントレットに換装可能。

内部の

・機体に2基接続されている多機能スラスター「オービット」

エネルギージェネレータによって

高出力のエネルギー兵器を使用することが可能。

・宇宙空間での航行及び戦闘行動を想定してカスタムされているため、

背部のメインブースター、全身のスラスターがある。

PICと同時に使用するため、高起動を実現している。

・しかし、まだ一次移行すら起こしていない初期設定のまま。
ファースト・シフト デフォルト

・外見は、ナインボールにGA製追加装甲を全身に取り付けたような形。

・サイズは白式達より一回り大きい（白式が2mとすると2m 50cmぐらい）

・メインカラーはブラック。エネルギー光はレッド、ブースト光もレッド。

武装

・オービット：2基

・ほぼBT兵器と同じだが、自立行動が可能であったり、操縦者が決めた行動をさせる事も可能。

・エネルギーエネレータが搭載されている為、
ビーム・レーザー射撃等を行っても戻す必要はない。
また、マルチコネクタによって様々な物に接続が可能
で、

物資の運搬等に使う事も出来る。

・通常、オービットは「フレキシブル・シールド可動防壁」として追加装甲を取り付けられ、

機体肩部から（ハードポイントとは別）フレームによって直接接続されている。

・マルチロックオンミサイルMLM（可動防壁内部）

・その名の通り、複数の目標に対して同時攻撃が可能なミサイル。

・片方に20門、計40門の発射口から同時に発射可能。
つまり最大補足可能数は40機。

・チャフ・フレア・デコイ類（可動防壁内部・ハスラー本体）

・チャフはレーダーやレーダー誘導を阻害する為の物。

・フレアは赤外線誘導系の兵器の誘導を阻害する為の物。

・デコイは機体そっくりの欺瞞体を生成し、
ハイパーセンサー・レーダー等のありとあらゆる索敵
を欺瞞する為の物。

- ・広範囲に上記の物を全て使用するとISといえども追尾を行うことが不可能になる。

- ・実体・エネルギーシールド（可動防壁）

- ・殆どそのままな武装。

エネルギー発振器を露出させる事でエネルギーシールドを展開する。

- ・特殊装甲武装腕部

多数の武装を内包したガントレット。

その性質上、通常の腕部より肥大化している上、内部は機械で一杯の為

拳部分のコントロールはトレース式を使用している。

後述のバンカーを保護する為、1m50cm程の装甲が外側についており、

その他殆どの武装はそちらに搭載されている。

- ・実体剣（特殊装甲武装腕部）

・後述のパイルバンカーを覆う拳上部のアーマーの間から展開する。

- ・刃先は原子とほぼ同等、

さらに刀身が超振動する事で切れない物はほぼ無い。

・エネルギーブレード（特殊装甲武装腕部）
・拳上部のアーマー、そこにある発振口から展開する。

利便性は高いが威力はMON^{月光}LIGHTに劣る。
・何故か実体剣と鏢迫り合いが出来る。裕樹自体も理解できていない。

・パイルバンカー（特殊装甲武装腕部）
・全長1m程の超攻撃的なパイルバンカー。
威力は灰色の鱗殻グレイ・スケールよりも高く、
並みのISならクリーンヒットで即機能停止に追いつめる程。

・掌を貫通するようにも撃ち込める為、敵を掴んで打ち込むことが可能。
その場合は間違いなく絶対防御諸共、装甲を貫通する。

・各種腕部・肩部・背部武装（AC装備）
・レイヴンの使用する各種装備を使用できる。

・各種腕部・肩部・背中武装（NEXT装備）
・リンクスの使用する各種装備を使用できる。

・対熱光学迷彩

が出来る。

- ・監視衛星の画像判別、サーマルセンサーをもちかわす事が出来る。
- ・チャフなどと併用すると、使用者が意図しない限り機体の現在位置や状態などは探知不能となる。

強化パッケージ

- ・重砲撃戦特化パッケージ「山荒」やまあらし
- ・有沢重工が斉藤裕樹の為にだけに製作した特殊兵装腰部ハードポイントに接続する「KUSATU」、腕部ハードポイントに接続する「SIRAHONE」、肩部ハードポイントに接続する「IKAHO」を使用する斉藤裕樹専用と言っても過言ではないパッケージ。

- ・両背部にOGOTO、両肩部にIKAHO、両腰部にKUSATU、両腕部にSIRAHONE、両手にSAKUNAMIを装備する。（※すべてグレート・ネード）

・さらに脚部など武装がついていない部分は追加の装甲が加えられている。

・一斉掃射すれば辺り一帯があつと言う間に更地に変貌する。

その絶大なる威力の反面、
全ての武器を一度に全て使用できる技術が必須である

事と

四脚、タンク以外の脚部では移動しながらの砲撃は不可である事が欠点。

- ・それぞれの武装は個別に使用できる。
中でも裕樹のお気に入りにはKUSATU。

・ブースターパック「疾風」

- ・1基のメインブースターと6基の補助ブースター及び多数のスラスターからなるパッケージ。

れ、
・装着時には背部装甲が展開、内部のコネクタと結合さ
本体のメインブースターは補助に回る。

- ・戦闘モード、最大戦速で1000km/hを叩き出す。
連続QBクイック・ブーストを使用すると1500km/hを超える。

い。
・篠ノ之束が制作した為、耐久性が本体に比べかなり低

・ブースターパック「迅雷」

る。
・構成は同じだが推進力と耐久力が飛躍的に向上してい

- ・戦闘モード、最大戦速で1500km/hオーバー、
連続QBクイック・ブーストを使用すると2000km/hを超える。

・ 斉藤裕樹改修型。

・ ブースターパック「疾風迅雷」

・ VOB完成までの繋ぎとして疾風と迅雷を組み合わせ
て作られた物。

・ 2基のメインブースターと12基の補助ブースター、
及び多数のスラスターに増加されている。

・ 戦闘モード、最大戦速で2000km/hオーバー、
連続QBを使用すると2500km/hを超える。

・ 装甲の増加に伴い耐久性がIS並に向上。

新世代
ネクスTIS「黒い閃光」
ブラック・グリント

・ ハスラー・ワンの本来の名前。一次移行時以降にこう呼称さ
れる。
ファーストシフト

・ 各国の軍事行動が監視された続けた上に、
コアを巡る国家間の戦闘が勃発する直前に両陣営の軍隊が無
力化された事件
シャッタード・バトルフィールド

「閉じられた戦場事件（通称SB事件）」に使用された機体。
対処用コードネームは、雷のような速さとその機体色から付
けられた

「黒い雷光」^{ブラック・ライトニング}が基本的に各国で使用されているが、ドイツでは「黒き稲妻」^{シュヴァルツェア・ブリッツ}が使用されている。

・更に頑丈になった装甲、圧倒的な火力、ISすら凌駕する機動性を有し、

ジェネレータの大出力・大容量に伴い
コアエネルギーがすべてシールドエネルギーにまわされ、
シールドエネルギーの値が1000と大幅に上昇している。

・AMSによる機体操作技術を併用している為、
思考した行動なども寸分変わらず再現可能。

・シールドエネルギーを消費せずに展開されるPAと、
PAを攻勢変換する事によって付近の攻撃を無力化する
全方位飽和攻撃のAA^{アサルト・アーマー}を実戦装備している為、
「もはやISでは無くなっている」と言うのは篠ノ之束の談。

・オービットの増加に伴い、ジェネレータが増設、
更なる高出力・大容量・高効率化もされた為、エネルギーが
切れる事は無い。

・形状は「ホワイト・グリント」の色違い。
しかし、肩部兵装がマウント出来る様になっていたりするな
ど相違点もある。

・ハスラー・ワンに引き続き背部、肩部、腕部、腰部にハード
ポイントが
設置されており、換装をする事により様々な戦闘状況に対応
出来る。

・メインカラーはブラック。エネルギー光はシルバー、ブースト光はグリーン。

武装

・オービット…8基
アンロック・ユニット
・肩部・背部・腰部に非固定浮遊部位として配置されている。

・特殊装甲武装腕部
アーマード・ガントレット
・エネルギーブレードのサイズ・出力が著しく向上している。

・各種腕部・肩部・背部武装（AC装備）

・各種腕部・肩部・背中武装（NEXT装備）

・対熱光学迷彩

強化パッケージ

・重砲撃戦特化パッケージ「山嵐」

・ブースターパック「疾風迅雷」

・VOB

・ヴァンガードオーバードブースト

・正式名称『前衛強襲型過加速推進装置』

・戦闘モード、最大戦速で3000km/hオーバー、
連続QBクイック・ブーストを使用すると3500km/hを超える。

・ブースターパック「疾風迅雷」の上から装着可能。

その場合、戦闘モード、最大戦速で4000km/h

オーバー

連続QBクイック・ブーストを使用すると5000km/hを超える。

しかしその場合PICを使用しての飛行は不可能とな

る。

・疾風迅雷よりさらに推進力、耐久力が上昇。

操縦者：リリウム・オルコット

新世代
ネクストIS「アンビエント」

・リリウムが駆るネクストと同名の全身装甲型IS。
フルスキン

・PA、AAを実戦装備。

しかし機密である為、裕樹が使用を開始するまで封印される。

・ブラック・グリントほどではないがエネルギー出力はデカイ。
そのため、水上などでホバリングしていても機動用エネルギーが回復していく。

・レーザーライフル、アサルトライフル、レーダー、機体追従型ECM発生装置、

スタビライザー擬装型ビットを装備。全体的にバランスの取れた装備と言える。

・肩部、背部、腕部ハードポイントに武装が接続可能。

・戦闘中に各パーツを換装可能。といっても殆ど使われない。

・メインカラーはシルバー、エネルギー光は武器がレッド、ブリストがグリーン。

武装

・O67ANLR

BFF最新武器をIS版。

スターライトmk?より小型なため、

単発威力は低いが弾速と連射力が上回っている。

- ・063ANAR

優秀なアサルトライフル。

遠距離に近い中距離でも高い命中率を誇る。

- ・063ANEM

機体追従型ECM発生装置。

味方全体の反応が消せる為、

チーム・タッグ戦では恐ろしい程の効果をもたらす。

- ・スタビライザー擬装型ビット

足元についてるアレ。

裕樹のオービットと違い、ブルー・ティアーズの様に射

撃後に戻して

エネルギーを供給する必要がある。

強化パッケージ

- ・VOB

- ・ヴァンガードオーバードブースト

- ・正式名称『前衛強襲型過加速推進装置』

- ・戦闘モード、最大戦速で3000km/hオーバー、
クイック・ブースト
連続QBを使用すると3500km/hを超える。

プロローグ（前書き）

はあい！RAGです。

もう1つの小説が全く進まないから
こっちも投稿することに相成りました。

更新速度？何それ美味しいの？という感じですのでお気をつけて。

I S ーインフィニット・ストラトスー黒い閃光 へようこそ！
歓迎しよう！盛大にな！

プロローグ

この世には、強者と弱者がいる。

大人が強者、子供が弱者

富める者が強者、貧しい者が弱者

力だけで無く、心の強さ・豊かさでも分けられる。

通常、ちからをもつものめらをもたぬもの強者は弱者を守るものだが、中には弱者をいたぶる賤しい強者がいる。

その様な輩は「この世の汚点」や「下衆」と呼ばれたりする。

そして、此処にも「下衆」な大人達に襲われる弱者が3人。

その3人の名前は「織斑 千冬」と「織斑 一夏」そして「篠ノ之 箒」

どうやら3人での買い物物の帰りだったのだろう、千冬と一夏は買い物袋を手を持っている。

大人達、と言うより20歳になった不良達は自分より弱い者を痛め付けて憂さ晴らしをする連中で、

今日はたまたま一夏達が当たった、という事だった。

「てめーら、一体なんだよ!」

「はっ! ガキがゴチャゴチャうるせーんだよ」

「……退いてください」

「おー! こっちのねーちゃん可愛いじゃん、邪魔なのボコしてからやっちまおーぜ!」

「っく、離せ!」

「こっちのちっこいの中々だぜ」

「てめーら！やめろっ！」

「男はすっこんでろ！」

「ぐあっ…」

一夏は不良1（リーダー）に殴り掛かったが、所詮は子供の力、不良1は痛がる素振りも見せずに一夏の腹を殴り、地面に叩き付けた。

『一夏っ！』

「へへへ、2人はコッチだぜえ」

「貴様、放せ！一夏！大丈夫か！」

「気持ち悪い！」

「リーダー、やっぱりそのちっこいのからボコした方が良いみたいっすわ」

不良2と3（金魚の糞）は2人を抑えようとするが、なかなか押さえ付けられなかったため、不良1に一夏をどうにかしろといった。

「だなあ…ま、運が悪いと思って諦めな、ガキ」

「ぐっ…てめ…え…」

一夏は先程叩きつけられた為まともに動けなくなっていた為、振り上げられる鉄パイプをただただ見ているしかなかった。

そして、鉄パイプが振り下ろされた。

「っ……？あれ…」

「て…てめえ…何者だ！」

が、それは空中で止まっていた。いや止められていた。

「全く、大の大人が子供に寄って集って乱暴を働くか、世も末だな」
吸い込まれる様な黒い髪、深い黒の瞳、そして一夏ほどの小さな体。
その子供の左手一本で鉄パイプは固定されている。

「…はははっ！！なんだなんだ、ガキが1人増えただけがぶぁ！」

少年は「下衆」の言葉に耳を貸す気は無いとばかりに右の拳を腹に叩き込んだ。

不良1は崩れ落ち、口から泡を吹いて気絶した。

「おい、その金魚の糞2つ」

『は、はひい！』

「俺は面倒が嫌いなんだ、コイツを連れてさっさと失せろ」

『ひ…ひいいいいいい！！！！』

その行動に呆気にとられていた2人は急に発せられた少年の殺気にあてられ、そのまますごごと引き上げていった。

「…ちっこいの、立てるか？」

「お、おう」

「さっきのガッツは買いたがな、もっと強くなってからやる事だ…
じゃあな」

一夏を引っ張り起こした後、そのまま何事も無かったように去っていく少年を、千冬が引き止める。

「君！名前は何と言うんだ！」

「…レイヴン」

「君はなぜ此処に来たんだ?!」

「たまたま通り掛っただけだ」

「何にせよ、君にお礼がしたい!」

「礼など要らない。腹が立ったから殴った、それだけだ」

「なら、せめて休んで行かないか?! 私の家も近い!」

「遠慮しよう。次の仕事があるんでね」

此処で千冬は疑問を感じた、なぜ子供が「仕事」等と言うのか。
その疑問は次の質問で解決された。

「君は一体何者なんだ!」

「……俺は」

少年―レイヴン―は振り返った。その瞳は心なしか爛々と輝いて
いると3人は思った。

「傭兵だ」

そしてレイヴンは振り返りそのまま去って行った。

それは、世界にISが発表される1ヵ月前の出来事だった。
そして、この出会いによって、文字通り世界を巻き込んだ物語が動
き始めた。

プロローグ（後書き）

一応シリアス？な感じになったかな？

ちなみに主人公の名前は「レイヴン」じゃないよ！

名前は次回で。

ヒントは「作者は主人公の名前を考える面倒が嫌い」です。

それじゃあ、また次回！

第一話（前書き）

やあ、魔法少女リリカルなのはStrikers
くど（ほぼ）同時投稿なんだ、
漆黒の守護神
ゆっくりしていい。

第一話

世界で始めて男子がISを起動させてから二週間後の午前10時、その男子の姉である織斑 千冬は自宅の前である人物を待っていた。その人物は、自分の弟、ISを使えるただ1人の男子であった織斑 一夏の護衛として

厄介な幼馴染^{バカ}が送り込んでくる2人目のISを使える男子である。

しかし、来る日しか知らされていないのでこうして（若干殺気を放ちながら）待っている訳である。

「しかし、もう1人ISを動かす男子が出てくるとはな。

：まあ、あそこに一夏1人が放り出される事態が回避できたのだから良しとするか」

IS学園はISの性質上女子の生徒しかない。そこに男が1人入ったらどうなるか、

答えは簡単、極限まで腹を減らした狼がひしめく檻に羊を一頭入れるようなものである。

そして、羊が増えれば増えるほど一頭辺りに喰らいつく狼は減る。あわよくば男子がもっと増えて一夏への被害を防げるくらいになつて欲しいと思う辺り
相当なブラコンである。

「……それにしても遅いな、一体何処で油を売っているんだ……つと、あれか？」

視線の先にはメモ書きを持ってうろろうしながら電柱等の住所表記

を確認している男子が一名。
遠目で見て身長は180cm、標準的な体形より若干デカイ（筋肉的な意味で）。

「その君、探し物か？」

「あ、はい。織斑さんという方の家に行きたいのですが、渡された地図が無茶苦茶で…」

そう言いながら差し出してきたメモ書きには、

「織斑」と書いてある家の記号と訳の判らないグチャグチャの線。

「織斑は私だ。…良くこんな物で此处まで来れたな」

「そうでしたか、良かった。

…住所を言っているのが少しだけ聞こえてたので大体の場所が絞り込めたのが要因ですね」

「そうだったか…そうそう、私は織斑千冬だ。君は？」

「自分は齊藤裕樹さいとう ゆうきです。これから暫くの間お世話になります」

そう言って頭を下げる裕樹に千冬は苦笑し、

「なに、こっちも弟の世話をして貰うんだ。どっこいどっこいだよ」

「弟さん…一夏君ですが、ISの学習の方は…」

「全く駄目だよ、護衛のついでに教えてくれるとありがたい」

「ああ、織斑さ「千冬さんでいい」

：千冬さんは学園の方で忙しいですから自分が教えた方が良いでしょうね。

それに、ISの事をロクに知らない奴を護衛しろと言われたって無理ですしね」

今後の事について軽く話しながら歩いていた2人だが、その目的地に到着した。

「さ、ようこそ我が家へ」

「はい、失礼します」

「暫くはただいまだがな」

「千冬姉、来たのか？」

「ああ、そうだ。早く挨拶をしろ」

来たばかりなのに早速挨拶をさせられる一夏。千冬さんは変な所で
厳しいなあ

「分かってるって：俺は織斑一夏。これからよろしく！」

「自分は斉藤裕樹。こちらこそよろしく」

「もちろんだぜ裕樹！：なあ、敬語はやめてくれないか？なんか、
変な感じがするんだよ」

「ははは、面白いな一夏は。分かった、俺もこれからはタメで喋る

よ」

「二夏、早速ISについて教えてもらえ、1人でやるよりは楽だろう」

「うへえ：飲み物と参考書を持ってくるから裕樹はリビングで待っていてくれ」

「ああ、分かった」

「じゃあ斉藤、後は任せる。私は少し買出しをしてくる」

「はい、お気をつけて」

「気をつけてな、千冬姉」

「わかっているよ」

そう言って千冬さんは外出した。

俺はそのままリビングへと移動、背負っていたリュックサック（丈夫な軍事用の物）を降ろし、

中から参考書（手書きの解説がはいっている）と

ISの専門用語を纏めた電子タブレットと筆記用具を出しておく。

「待たせたな、裕樹：って凄いな、全部自分でやったのか？」

「まあね：じゃ、早速始めようか」

少年勉強中……

1時間ほど経っただろうか、既に千冬さんも帰って来ており、なぜか俺が一夏に教えている内容に耳を傾けている。

「なあ、裕樹。パッシブ・イナーシャル・キャンセラPICってどういう原理なんだ？」

「…一夏、今までの質問から推察すると理系が苦手じゃない？」

「！、良く分かったな！」

「簡単な電気回路の問題や物理で質問をすれば誰だってそう思うだろうが、馬鹿者が」

「…まあ、簡単に説明すると、慣性制御によって急加速・急停止・急上昇・急下降等を可能にして

さらに操縦者への衝撃緩和も行ってるんだ」

「ああ、大体分かった。参考書だと面倒臭い単語が並んでて分からないんだよなあ」

「お前はもう少し本を読め。それにしても噛み砕いて説明するのが旨いな、斉藤」

「あはは、その分正確さに欠けますけどね…じゃあ一夏、次のページ行くぞ」

「おう…って、そろそろ昼飯の準備を始めたいな」

「じゃあ、このページが終わったら始めよう……ISの分類について――」

30分ほどで次の内容が終わり、そのままお昼になった。

仮にも居候な訳なので手伝いをしていたら何故か一夏VS俺の料理対決という流れに。

審査員はもちろん千冬さん。「なにこれ、ふざけてるの?」と思ったが結果は引き分け。

勝負事に関してはきっちりするんだと思った。

そしてそのままIS学習午後の部を開始。

やはり概念の理解が難しいらしい。とはいえとりあえず理解はしている様なのでそのまま続行。

なにせ最低2ヶ月掛けて学ぶ内容を入学式までの1週間で詰め込まなければならぬのだ。

そして時は流れて午後7時、好評晩御飯中である。

「そういえば斉藤、こっちでの生活はどうするんだ？」

「ちょうど隣のお宅が引越す様なのでそこを拠点にしようかと思ってます」

「こっちに居る時ぐらいここに居てもいいのに、なんでだ？」

「いつまでも居候している訳には行かないからな、それに真夜中に
出掛けたりもするから迷惑も掛かるし」

「まあ、同族のよしみで色々教えてやってくれ」

「はい、了解しました」

その後も色々な話をしながら箸を進めていった。

そんな生活が1週間続き、いよいよ運命の日がやって来た。

そう、男子禁制（という訳ではないのだが）の女の花園^{だった}IS学園入学式である――

第一話（後書き）

ははは、主人公の名前は「斉藤裕樹」だ！

裕樹「いや、かぶってるじゃん。自分の小説と」

そこはアレだ、クロスさせたいと思ってるからな

裕樹「…はたしていつクロスするのだろうか……」

第二話（前書き）

やあ、こっちの方が早く書けるよ。

そろそろ資格試験が近いので来週の投稿は無いと思って欲しい。

第二話

無事に入學式が終わり、そのまま1年1組の教室へ移動。

今は、指定されていた席順で着席して担任・副担任の紹介を待っている。

ちなみに俺の席と一夏の席は隣同士で、一夏共々後ろからの視線を浴びている。

「…これは…想像以上にキツイ…裕樹は大丈夫なのか？」

「まあ、この位なら想像は出来てたしな。…っと、先生が来たぞ」

コソコソ話をやっている先生が入ってきたので一旦やめる。

おそらく今の会話は興味津々な女子達が聞き耳を立てていただろう。

ふと、先生を見てみると驚愕した（もちろんポーカフェイスで）。身長は生徒のソレと同じくらい。服のサイズが合っていないのかダボツとしていて、眼鏡も大きめでズレている。

まるで、「子供が背伸びして大人の服を着て、大人の眼鏡を掛けました」みたいな感じだ。

そして、ソレを否定するように実るたわわな果実。一体何が起きているのだろうか？

「皆さん入学おめでとう！私は副担任の山田真耶です」

「はい！よろしく願います！」

…間違いない、大人だ。しかし、なぜあんなったのだろうか。まさ

かP I Cが関係して……

って、ちょっと待て。今挨拶したの俺だけかい。

「うう…1人だけ……」

…あ、えっと、これから皆さんはこのI S学園の生徒です。

この学園は全寮制、学校でも、放課後も一緒です。

皆で仲良く助け合って、楽しい三年間にしましょうね！」

「はい！」

…また1人か、先生も困ってるじゃないか。

「善意が1人だけ居ますう…」とか聞こえたぞ、今。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」

どうやら女子達は一夏を凝視している様だ。さっきから背中に刺さる視線が軽くなったから恐らくそうだろう。

「…くん。織斑一夏くん！」

「は、はいっ!？」

何か考え事でもしていたのだろう、一夏が自分の名前を呼ばれ裏返った声で返事をした。

教室中でクスクス笑いの大合唱。

そして一夏が少しソワソワしたが、どっしりと構えている俺を見て落ち着いた様だ。

「あの、大声出しちゃってごめんなさい。

でも自己紹介『あ』から始まって今『お』の織斑くんなんだよね。

自己紹介してくれるかな？だめかな？」

「いや…あの、そんなに謝らなくても…」

確かに謝りすぎている。と言っても山田先生が気が弱いからなのだろうが。

「え…えっと、織斑一夏です。よろしくお願いします」

その瞬間、後ろからの視線が「ギランッ！」と鋭くなった気がした。いや、きつと目に菱形の光が輝いているだろう。

そして、その視線に一夏は何か言おうと葛藤している様だ。

…皆は気づいていない様だが、誰かが―と言っても担任だと思いが―入って来た様だ。

「…以上です！」

ガタタッ！

数人の女子が見事にすっこける。某お昼の新婚さんのための番組の司会者みたいだ。

「え？あれ？駄目でした？」

ガッン！

ツカツカと寄って来た担任こと千冬さんの鉄槌が下る。

「げえっ！神楽！」

ガッン！

「誰が兵器開発会社の会長だ、馬鹿者」

性別的にもアウトだし、年齢的にもアウトだしね。

「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかったな」

さっきとはうって変わって優しい声で山田先生と話す千冬さん…いや、織斑先生。

一夏「なんで千冬姉が此処に？」と言う顔をしている。そういえば一夏は知らなかったのか。

「諸君、私が担任の織斑千冬だ。

私の仕事は弱冠15歳を16歳までに鍛え抜く事だ。

逆らっても構わんが、私の言う事は聞け。いいな」

おおよそ教師とは思えない自己紹介であるが気にしてはいけないうだろう。

そして一拍置いて…

「キャア——！千冬様！本物の千冬様よ！」

「ずっととファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！北九州から！」

遠路はるばるお疲れ様です。どうぞ寮で休んでください。

それにしても凄まじいまでの黄色い歓声。織斑先生も呆れている。

「で？お前は自己紹介もまともに出来んのか、お前は」

「いや、千冬姉、これは…」

パンツッ！

「織斑先生と呼べ」

「はい、織斑先生…」

出席簿と机に挟まれくぐもった声で答える一夏。
…今のやり取り不味いんじゃないか？

「え？…織斑くんって、あの千冬様の弟…？」

「それじゃあ、男でISを使えるって言うのもそれが関係して…」
「じゃあ、もう1人の方は…」

2人が兄弟であるとバレた上に此方まで火の粉が飛んできた。一夏
エ…。

「静かにしろ！自己紹介を続ける！…斉藤、お前だ」

「はい」

鶴の一声とは正にこの事、一瞬で静かになった。

「斉藤裕樹です。」

趣味は射的と読書、好きな食べ物はコーヒー（ブラック）と甘味
系全般、嫌いな食べ物は特に無いです。

2人だけの男子と言う事で迷惑を掛けるかも知れませんが、これ
からよろしくお願いします」

さすがに一夏の二の舞は演じられないので、ちゃんと趣味や好き嫌いを付け加える。

カリカリとメモを取る音があちこちから聞こえた。

「じゃあ、次は…」

そのままつつがなく自己紹介は終わりチャイムが鳴った。

「諸君らにはこれからI Sの基礎知識を半月で覚えてもらう。

その後実習だが、基本動作は半月で体に染みこませろ。

いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

『はいっ!』

返事は返したが…このクラス本当に大丈夫だろうか。



時は変わって1時間目の休み時間。

一夏はちゃんと授業に付いて行っている様だ。

今は先まで読み進めていた教科書の疑問点を俺に聞きに来ている。自分で勉強、関心関心。

「で、ここの「物理シールドとエネルギーシールドの相違点」って所が良く分からないんだ」

「んー：噛み砕いて言うと、

物理シールドってのは相手の攻撃を装備しているシールド等で直接防ぐんだ。

利点はシールドエネルギーを消耗しない事。欠点は破壊される可能性があることだな。

エネルギーシールドはエネルギーフィールドを発生させて相手の攻撃を防ぐ物だ。

利点は破壊される可能性が無きに等しい事と、機動性を殺さない事。

欠点は直接喰らうよりはマシだけど、シールドエネルギーを消耗する事だ」

「おお、そう言う事か、サンキュー裕樹」

簡単に文章を書き、一夏は教科書を読んでいく。

「毎回言ってるけど正確さに欠けるからちゃんと調べて理解すんだぞ？」

「わかってるって」

「：ちよつといいか」

黒い髪ーと言っても俺みたいに真っ黒じゃないがーを後ろで結ってポニーテールにしている女子が一夏に話しかけた。

たしかあの時にも居た束の妹さん：名前は箒、だったか。

「あ、裕樹。ちょっと行って来ていいか？」

「構うな、早く行ってやれ」

「サンキュー、裕樹」

一夏はそのまま席を立てどこかへ行った。

その動きと同時にクラスと廊下に来ていたギャラリーの半分程がゾロゾロ付いていった。

全く、そんなに男子が珍しいか。俺達はウーパールーパーじゃないんだぞ。

いや、たしかそのブームは数年で無くなったからその方が良いかもしれない。

次の時間の準備はもう済ませている為、正直暇だ。

話し相手は互いに牽制しあって寄って来ないし、一夏も篠ノ之さんと何処かで話していて此処にいない。

大事だからもう1回言っところ。暇だ。

腕時計（形はファイズアクセル）で確認したが、次の時間までは8分ほど時間がある。

（ちなみに、教室にはちゃんと時計がある。

腕時計で確認するのが癖になっているのでどうしてもこうなる）

そうだ、時計の整備をしておこう。と言っても整備ウインドウを開いて弄るだけなのだが。

整備ウインドウを開き各部を点検していき、異常が無いか確かめる。

と言ってもこの時計、実は中にI Sの待機状態が納まっている。

ブレスレット方に近いそれはデジタル表記で時間が表示される。

さらに表示部近くにある空間投影ディスプレイのインデックスをスライドさせると

詳細な日時、天候、気圧、風速等の表示から、

無線、オープンチャネル等の通信を使用・傍受も出来るウィンドウが開く。

：いままで数回しか使っていないが。

キンコンカンコン。

「斉藤、授業の時間だ。時計の整備はやめろ」

コッソ

「了解です。織斑先生」

あれ、もう2時間目か。没頭すると時間が経つのが早いなあ…

今織斑先生が出席簿を軽く乗せるぐらいでしか叩かなかったのは驚きだったな。

パアンツ！

「とっとと席に着け、織斑」

「……ご指導ありがとうございます、織斑先生」

あ、一夏が叩かれた。

席に着くのが遅かったからじゃないか…



「―であるからして、ISの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり―」

山田先生が教科書をすらすら読んでいる時、俺こと織斑一夏は世界でもう1人ISを使える男、斉藤裕樹に猛烈に感謝していた。

「（いや、裕樹が教えてくれなかったらどうなっていた事か）」

ここ、IS学園は文字通りISを学ぶ学校だが、中学の時点でISの勉強を取り入れている中学校は珍しくない。

IS学園に入る為には馬鹿げているくらいに倍率の高い筆記試験をクリアして、

さらに実機を使用した試験をパスする必要がある。

つまり、此処にいる奴らはエリートだって事だ。

比べて俺は男だからISの勉強なんてやっていないし、ISを動かした事もあの日まで無かった。

この時点でかなり…と言うより太陽とミジンコぐらいの地力の差はあったと思う。

そこに俺の護衛兼家庭教師として裕樹がやってきた。

最初の頃は優しかったが段々と厳しい、と言うか千冬姉みたいな現実主義の面が出てきた。

心を折られそうになったりもしたが、信頼されてきたって事で納得した。

閑話休題。裕樹はド素人の俺に懇切丁寧に、1の事を50くらいに細かく噛み砕いて教えてくれた。

すこし現代兵器を齧った事もあって100じゃなかったが。

まあ、そんな訳で教科書の内容なら大体理解出来る様になった。

裕樹から「とりあえずほとんどの内容は教えたが正確さに欠けた教え方だから良く復習しろ」と言われているからなんども教科書を見て理解を深めている。

「(…多分、ほとんど全部分かりません！なんて言ってたんだろうな)」

想像しただけで背筋に冷たい物が走る。

「…らくん、織斑くん！」

「は、はいい！」

あれ？こんな事前にあつたな…

パンツ！

「ちゃんと授業を聞かんか、馬鹿者」

ぐおお、強烈だあ…

「一夏、ISは機動力、攻撃力、制圧力等どれをとっても既存の兵器を大きく凌駕する『兵器』なんだ。

どんな兵器でも理解が深まってないのに使えば大惨事を引き起こす。

「そうしない為の座学であり実習なんだ。真面目にやれよ？」

グハッ…こういう時の裕樹の言葉は深く刺さる。これから真面目にやらねば。

でもよく考えたら俺が希望してここに居る訳じゃないんだよなあ…

「……貴様、『自分は望んでここに居るわけではない』と思っっているな？」

流石千冬姉、鋭いぜ

「望むと望まざるとにかかわらず人は集団の中で生きていく必要がある。」

それを放棄するなら、人を辞める事だ」

裕樹より厳しい千冬姉の超現実主義。噛み砕いて言えば現実を直視しろって事か。

「それに、俺達には世界中の『空を失った』戦闘機乗り達の期待も掛かってる。」

どうせ、そう易々と辞められる訳じゃないんだ。

だったら、そいつ等に夢を見せてやるのも良いだろう？」

ISが出てきた事によって各国の資金はISの研究開発に注がれてこれまでの兵器に回される資金は極めて少なくなった。

当然、今まで空を支配していた戦闘機達は次々と消えていき、そのパイロット達も地を這う事を余儀なくされた。

そんな時、俺と裕樹がISを…男がISを動かしたニュースが世界中に流れた。

その時、彼らは何を考えただろうか。
羨望？ 憤怒？ それとも嫉妬？ そんなごちゃ混ぜの気持ちになった事
だろう。

それでも、彼らは俺達に期待を抱いた事だろう。そして今も変わら
ないはずだ。

：そうだ、人として、同じ男として、その期待に背くことなんて出
来る訳が無い。

それに、千冬姉に恥をかかせて、職場で肩身の狭い思いをさせるか
も知れない。

：俺は家族を、仲間を見捨てたりはしない。顔も知らない親達とは
違うんだ。

「えっと、織斑くん？ 次からちゃんと授業を受ければいい訳ですか
ら、ね？ ねっ？」

「はい、わかってます」

「はい、よろしい。じゃあ、授業の続きを…わきやあっ！」

教卓に戻る途中に山田先生がコケた。

『（本当に、大丈夫なんだろうか）』

裕樹と同じ事を思った気がした。

第三話（前書き）

やあ、資格試験に（恐らく）合格したよ！

これで書きすめられるぜ！

第三話

「ちょっと、よろしくて？」

「へ？」

「なんだ？」

2時間目の休み時間、

一夏の質問（段々と質問の内容が高度な物になってきている）に答えている時

いきなり声を掛けられ一夏は素っ頓狂な声で、

俺は「今、話しているんだから話掛けんじゃねえ」と言う気持ちを込めて返事をする。

話し掛けて来た女子はロールのかかった金髪で、

透き通るような青い瞳がややつり上がった状態で俺達を見ている。

そいつの纏っている雰囲気はまさに「貴族」といった感じだ。

それも「レオハルト」や「ジェラルド・ジェンドリン」並みの。

ちなみ今の世の中はISが世に出たおかげで「女尊男卑」真っ盛りだ。

（まあ、その片棒を担いだ…担いでしまったのが俺な訳だが）

そんな世の中だから町を歩いていると

すれ違っただけの女にパシリをさせられる男も少くない。

嘆かわしい事だ。

そして、目の前にいるコイツもその部類の様だ。

もともと高貴な身分というのもあるのだろうか。

「まあ！なんですよ、そのお返事。
わたくしに話し掛けられただけでも光栄なのですから、
それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら？」

『……………』

正直、俺はこういうタイプとは関わり合いたくない。
それは一夏も似たようなものらしい。

ISを操縦できる⇨国家の軍事力になる⇨IS操縦者は偉い⇨女は
偉い。

それは認めよう。
だが、問題はそこからだ。この図式をどう考えるか。その力をどう
振るうか。

力が粗暴なら、それは暴力。
そして、それを振るっていいのは覚悟のある者、殺^やられる覚悟のあ
る者だけ。
他人に向ける以上、自分に帰ってくるという自覚の無いコイツは、
所詮そこまで。

「悪いな。俺、君が誰か知らないし」

一夏がそう言う。恐らく、千冬さんが教師だった事が驚きだったの
だろう。

一応、自己紹介は聞いていたので覚えている。
セシリア・オルコット、イギリスの代表候補生だ。

どうでもいい話だが、リリウム・ウォルコットと苗字が似^{フアミリーネーム}ている。

ややこしい。」

「わたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？
イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを？」

ほう、入試主席か。じゃあ織斑先生を倒したんだろうか。
いや、もともとあの人はジャッジの筈だから俺だけか。

「あ、質問いいか？」

「ふん。下々の者の要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしく
てよ」

「代表候補生ってなんだったつけ？」

ガタタツ！

…俺も気が抜けてこけそうになった。

一応、教えたと思うんだが…ああ、必要じゃないから忘れたか。

「あ、あ、あ……」

「「あ」？」

「あなたっ、本気でおっしゃってますの！？」

「おう、知らん」

「……………」

正直に言う一夏。まあ、下手な見栄は身を滅ぼすとは言いが…
これが心理戦の一手なら良いんだが、一夏に限ってそんな事は無い
だろう。

「信じられない。信じられませんわ。」

極東の島国というのは、こうまで未開の地なのかしら。
常識ですわよ、常識。テレビがないのかしら……」

それは別の国だろう。日付変更線の近くの方だ。

「…一夏、代表候補生ってのは

国家代表IS操縦者の候補生として選出されるエリートの事だ。
単語から大体の想像はつくだろうが、馬鹿者」

「…すみません、仰る通りです」

「そう！エリートなのですわ！本来ならわたくしの様な選ばれた人
間とは、

クラスを同じくするだけでも奇跡…幸運なのよ。
その現実をもう少し理解してただける？」

『そうか、それはラッキーだ』

「…馬鹿にしていますの？」

一夏は幸運だと言われたからだと思うが、俺は完璧に馬鹿にしてい
る。

「大体、もう1人は別として、

あなたISのついてロクに知りもしないのによくこの学園に入れ

ましたわね。

最初にISを操縦した男子と聞いていましたから、
少しくらい知的さを感じさせるかと思っていましたけど
…期待はずれでしたわね」

「俺に期待されても困るんだが…そういうのは裕樹にやってくれ」

人に面倒ごとを押し付けるな、一夏。

と言うより、自分の名前を知らない事に怒るのに
他人の名前を覚えていないとはどういう見だろうか。

「ふん。まあでも？わたくしは優秀ですから、
あなた達の様な人間にも優しくしてあげますわよ」

優しくするついでにデータを取ろうって魂胆か。

…それにしてもずいぶん高圧的な優しさだが。

「ISの事で分からない事があれば、
まあ…泣いて頼まれたら教えて差し上げてても良くてよ。
何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートで
すから」

「裕樹で事足りてるからいいや。それに俺達も倒したぞ、教官。な
？裕樹」

「ああ、確かに倒した」

「は……？」

まあ、一夏は突っ込んできた山田先生をかわしたら
勝手に壁にぶつかって気絶したんだが。

ん？俺？俺は打鉄の武装を破壊して戦闘続行不能にさせた。
なぜか？使用武装の数が不明であるという
重要なカードをみすみす手放す訳にいかないからだ。

「わ、わたくしだけと聞きましたが？」

「女子ではってオチじゃないか？」

こいつぁヒデオオチだ。笑えないな。

「つ、つまり、わたくしだけではないと…？」

「恐らく、そうだろうな」

「本当に教官を倒したんですの！？」

「ま、まあ…多分」

「多分！？多分ってどういう意味かしら！？」

「いいから、少しは落ち着け」

「これが落ち着いて…」

キンコンカンコン。

おお、3時間目開始のチャイム。これでこの面倒なやり取りから開
放…

「っ！…また後で来ますわ、逃げない事ね！よろしくって!？」

されないようだ。教科書を出しながら適当に返事をする一夏と俺。本当なら断りたいが結局怒るんだろうからやめておく。

「それではこの時間は実戦で使用する各種装備の特性について説明する」

教壇には山田先生ではなく織斑先生。山田先生は端の方でノートを取っている。

「ああ、その前に再来週行われる
クラス代表戦に出る代表者を決めなければならないな」

うへえ、また面倒な事になるぞ：

「クラス代表者とはそのままの意味だ。
対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席…まあ、
クラス長だな。」

ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。

今の時点でたいした差はないが、競争は向上心を生む。
1度決まると1年間変更は無いからそのつもりで」

ざわざわと教室が色めき立つ。恐らくどっちの男子にやらせるか考えているのだろう。

俺は面倒が嫌いだから一夏に任せてしまおう。

「はいっ！織斑くんを推薦します！」

「私もそれがいいと思います！」

「私は斉藤くんがいいと思います！」

「はいっ！私も斉藤くんを推薦します！」

…クソッ、結局教室で意見が真っ二つになりやがった。

これは…面倒な事に…なっ…た。

「ちよっ、ちよっ待った！俺はそんなのやらな——」

「自薦他薦は問わないと言った。他薦された者に拒否権は無い。
選ばれた以上は覚悟しろ」

「い、いやでも——」

確かに、織斑先生の言うことは正しい。仕方無い、覚悟を——

「待ってください！納得がいきませんわ！」

…コイツは間が読めないのだろうか、さっきといい今といい…

「そのような選出は認められません！」

大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！

このセシリア・オルコットにその様な屈辱を1年間味わえと仰る
のですか！？」

多数決は昔から存在するれっきとした集団意思決定方法の1つだし、
誰も—少なくとも俺は—お前が受ける屈辱なんか気にするか。

それに、男のどちらかがクラス代表になれば、
必然的にそいつのデータを収集できるんだからイギリスの代表候補

生という立場上、
積極的に推進するべきだと思うのは俺だけだろうか。

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。
それを、物珍しいからと言う理由で極東の猿共になされては困ります！」

わたくしは——」

ほう、人を猿呼ばわりか。完全に舐められたな、これは。
おっと、織斑先生も眉を顰め始めたぞ、確かに長いからな。

「いいですか！？」

クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！

大体、文化でも後進的な国で暮らさなくてはいけない事自体、
わたくしにとっては耐えがたい苦痛で——」

「イギリスだってたいしたお国自慢無いだろ。

世界一まずい料理で何年覇者だよ」

「日本で暮らすのが苦痛以外の何物でもないのなら、
さっさとイギリスに帰ってあの単調で飽きる料理でも食って過
していると良い」

一夏と俺が続けるようにして言った。

当のオルコットと言えば、まさに怒髪天を突くと言わんばかりだ。

「あつ、あつ、あなた達ねえ！わたくしの祖国——」

「先にこっちの祖国を『文化でも後進的』と侮辱したのはそっちだ
ろう。

第一、代表候補生とあろう者が他人の祖国、よりにもよって

『ISの開発された』日本を侮辱したとなったら不味いんじゃないのか？」

「ぐっ…ううっ…」

ははは、ぐうの音も出ないとはまさにこの事。

面白いように話の種をばら撒いてくれたからさらにやり易い。

見ろ、織斑先生も僅かに「良く言った」と言う顔をしているじゃないか。

「決闘ですわ！」

「ああ、いいぜ。四の五の言うより分かりやすい」

「こんな面倒な事はしたくないが、

故郷^{くに}を馬鹿にされた以上、受けない訳は無いな」

まあ、通算してISをたったの一月[…]（720時間）も動かしてない

ハイハイしたての赤ん坊^{ルーキー}に負けることはまず無いが。

「ハンデはどのくらいつける？」

「あら、早速お願いかしら？」

「いや、こっちがどのくらいつけるかと言う事だ」

俺が正しい説明するとクラスから爆笑が起こった。

「お、織斑くん達、それ本気で言ってるの？」

「男が女より強かったのって、大昔の話だよ？」

「織斑くんと斉藤くんは、

それは確かにISを使えるかもしれないけど、それは言い過ぎよ」

こいつ等は本気で笑っている。そうであると疑いもしていない。

相手の情報が何も手元に無いと言うのに。

情報は昔から重要な物だった。

日本が戦争に負けた原因は情報のセキュリティが甘かったからと言
える。

「情報を制する者が、戦争を制する」

それはどんな時代に、どんな形になろうと変化はしない。

だから「慢心している奴ほど弱者である」と言う事になる。

慢心も何も、小学生の頃からそういう世の中になってしまったのだ
から

仕方ないかもしれないが、その事を教えてやる程、俺はお人好しじ
ゃない。

「……じゃあ、ハンデはいい」

「ええ、そうでしょうそうですね。」

むしろ、わたくしがハンデを付けなくていいのか迷うくらいです
わ。

ふふっ、男が女より強いだなんて、日本の男子はジョークセンス
があるのね」

さっきの怒りは何処へやら。今はその顔に嘲笑を浮かべている。

いまのやりとりを静観している織斑先生は、極めて僅かだが不快な

顔をしている。

恐らく、いや、ブリュンヒルデだったこの人なら、ちゃんと理解しているだろう。

「ねえ、織斑くん達。今からでも遅くないからセシリアに言って、ハンデ付けてもらったら？」

一夏に斜め後ろの女子が気さくに話しかけた。が、その顔は苦笑と失笑が混じっている。

一夏と俺はその表情にプチンと来た。

「男が1度言い出した事を覆せるか。ハンデはなくていい」

「一夏は別として、俺がハンデを付けなくていいのか疑問だな」

「えー？それは代表候補生を舐め過ぎだよ。それとも、知らないの？」

『……………』

知っているからこそ、こういう発言をするんだ。

第三世代型のデータは既に手中にある。エドもいい仕事をしてくれる。

「…話は纏まったな。1週間後の月曜の放課後、第3アリーナで勝負を行う。

各自、用意をして置く様に。それでは授業を始める」

さて、一夏には訓練もやって貰おうか。



放課後、一夏は軽くぐったりしている。

あらかた、また気合を入れて授業を受けたが分からない単語で苦戦していたのだろう。

「大丈夫か、一夏」

「おう、裕樹：大丈夫だぜ」

ちよつとの間は誤魔化していると言うことだろう。

「ああ、織斑くん、斉藤くん。まだ教室にいたんですね。よかったです」

「どうかしましたか、山田先生」

「えっとですね、寮の部屋が決まりました」

そう言って山田先生は、俺と一夏に部屋番号の書かれた紙とキーを渡してきた。

確か、1週間は家（一夏の隣の家）から通う筈だったが：圧力か？

「ええと、元々は時間を貰う筈だったんですが、事情が事情なので一時的な処理として部屋割りを無理矢理変更したらしいです。

：2人共、その辺りの事って政府から聞いてます？」

最後は2人にだけ聞こえる様に話して来た。

政府は日本政府の事。一応、俺の国籍は日本になっているが、所属はしていない。

「政府特令もあって、寮に入れるのを最優先にしたみたいです。

1ヵ月もあれば個室の方が用意できますから、暫くは相部屋で我慢してください」

それはそうと、1つ疑問がある。

「山田先生、なぜ2人で部屋番号が違うのでしょうか」

「ええと……私も分からないんです。ごめんなさい…」

身長差がかなりあるため、上目遣い＋涙目＋たわわな果実のコンボを喰らう。

某悪活舌のライダーよりも強力だ。

「でも、荷物は纏めてないんで今日は1回帰っていいですか？」

一夏が言うが、お前の家にはもう1人住人がいるのを忘れちゃいないだろうか

「あ、いえ、荷物なら――」

「私が手配しておいてやった。ありがたく思え」

デーンデーンデーン、デーデデーン、デーデデーン。

なぜか暗黒卿のテーマがBGMで流れたが気にしないでおこう。

「と言っても、生活必需品だけだな。

着替えと、携帯の充電器があればいいだろう

…斉藤の方は荷解きがされていなかったからそのまま持ってきてあるぞ」

『どうもありがとうございます、織斑先生』

異口同音だったが、一夏は諦めた様に、俺は純粹に感謝の意を込めた。

「あ、織斑先生。明日から訓練機を使用したいのですが――」

「ああ、だったら私について来い。書類を書いて貰わなければならないからな」

「それともう1つ

……一夏の専用機は近接タイプだと思いますか？射撃タイプだと思いますか？」

「……近接タイプだな。アイツが戦闘中に射撃が出来るとは思わん」

後半からは一夏と山田先生にも聞こえない声で喋った。

やはり、一夏には専用機が用意される様だ。また束が関わってそうだが。

「分かりました、ありがとうございます

…じゃあ、一夏。明日からISの訓練を始めるぞ。

あと、剣道の相手を見つけておけよ」

「?……わかった、心当たりがあるから頼んでみる」

「じゃあ、斉藤。付いて来い」

そのまま織斑先生と職員室へ行き、訓練機―打鉄―2機の使用許可を貰った。

1機あたりレポート用紙5枚分の書類とかふざけているのだろうか。

◇

時間は経って、30分後。

（記入は5分で終わったが、注意事項などの説明がかなり長くなった。）

ちなみに説明担当は別の先生だった。）

渡された紙とキーの番号をドアの番号と照らし合わせる。

部屋番号は1050室。一体誰が先にいるのだろうか。

コンコン

「はーい」

「済まない、今日からしばらく同室になる者だ。
中に入っても大丈夫か？」

「うんー。だいじょーぶだよー」

ガチャリ

「どうぞー」

「失礼する」

ドアを開け、中に入りドアを閉める。
部屋の主は…

「あー！ゆうゆうだー！ほんとーにルームメイトなのー？」

「ゆうゆうって……ああ、キーもこの通り」

そう言って彼女ー布仏本音、通称「のほほんさん」ーに持っている
キーを見せる。

「ほんとーだ！じゃあー、これからよろしくねー、ゆうゆう」

「此方こそ、よろしく頼む布仏さん」

「のほほんさんでいいよー」

「じゃあ、よろしく、のほほんさん」

「よろしくねー…じゃあー、ゆうゆうは窓側のベッドを使ってねー」

「ん、了解だ」

そのまま、色々な事を決めて行き、
今日はユニットバスに湯を張らず、シャワーで済ませそのまま就寝
した。

（隣でソワソワしている音が聞こえたが、明日から忙しくなるので

気にせず寝た)

第三話（後書き）

はい、という訳で裕樹のルームメイトはのほほんさんです。
そしてあだ名が「ゆうゆう」

ゆ○パツクみたいですすが気にしない。

次あたりに戦闘に入れたらいいなあ…

リリなのの方を見てくれた方は分かるかもしれませんが、
戦闘シーンになると長くなる可能性があるのでご了承ください

第四話（前書き）

テスト前に何やってんだろ。

第四話

翌日の朝、のほほんさんは起きていなかったのので、一応、目覚ましを少し早めに設定しなおしてから食堂へ向かった。

朝早い事と開いたばかりと言う事もあり食堂は空いていた。

時間はかなりあるので急がずに

日替わり定食―今日はアイナメの煮付けと大根の味噌汁―を食べ進める。

食堂に人が集まる前に食べ終え、そのまま教室へ向かう。

そのまま（一夏の顔が若干青くなっていた事以外）何事も無く授業は進み、今は2時間目休み。

「ねえ、織斑くんさあ！」

「はいっ！質問しつもん！」

「今日のお昼暇？放課後暇？夜暇？」

「あー、ゆうゆう、今朝はありがとねー。
おかげで早く朝ごはんが食べれたよー」

「ああ、別に気にしないでいいよ」

「くうう、私も裕樹くんと一緒の部屋が良かったー！
「もー！」」

一夏の方は、様子見終了。いち早く物にしようと躍起になっている。
…整理券を配っている生徒も見受けられる。有料で、だが。

そしてこちらはのほほんさんのオーラ？のおかげで何事も無い。

「千冬お姉様って自宅ではどんな感じなの！？」

その間に織斑先生が一夏の背後に忍び寄る。

一夏ー！後ろー！

「え？ 案外だらしな——」

パンツ！

一夏の後頭部にいつもののがヒット！

「休み時間は終わりだ、散れ」

自分も叩かれては堪らないと、皆急いで席に着いていく。
蜘蛛の子を散らすようにとは正にこの事だ。

「ところで織斑、お前のISだが準備まで時間が掛かる」

「へ？」

「予備機が無い。学園で専用機を用意するそうだから、少し待て」

「????」

一夏の奴、忘れやがったか。

最低限知っておかなければならない事項だと言ったのに。

「一夏、教科書6ページだ」

「えっと…」

『現在、幅広く国家・企業に技術提供が行われているISだが、その中心となるコアの製造技術は一切開示されていない。』

現在世界中にあるIS467機、

その全てのコアは篠ノ之博士が作成した物で、

これらは完全なブラックボックスと化しており、

未だ博士以外はコアを作れない状況にある。

しかし、博士はコアを一定数以上作る事を拒絶している為、

各国家・企業・組織・機関では、割り振られたコアを使用して

研究・開発・訓練を行っている。

また、コアを取引する事はアスカ条約第七項に抵触し、

全ての状況下で禁止されています』

って事は…」

「特例に対しての優遇措置…というか、ただのデータ取りか。

さらに悪く言えば、実験用のモルモットだな、お前は」

「気味悪い事言わないでくれよ……」

ははは、実際そうだから仕方ないだろう。

それに、今の会話を聞いて

「専用機を持つなんて羨ましい」と思っている奴もいなくなっただろう。

国家や企業から渡される物の殆どはデータを取る為であったり、行動を監視ないし束縛する為であったりするのだ。

「あの、先生。篠ノ之さんって、もしかして篠ノ之博士の関係者なんでしょうか？」

ついにバレたか。まあ、いずれは分かる事だから仕方ないだろう。

「そうだ。篠ノ之はあいつの妹だ」

その一言と同時に教室中に悲鳴にも似た声が響き渡った。それにしても、重要な情報を明かしてもいいのだろうか？

「あの人は関係無い！」

：私はあの人じゃない、教えられるような事は何も無い」

：なるほど、確かにこうすれば後々の面倒は少なくなるか。それにしてももうちょっとやり方があると思うが。

「……山田先生、授業を」

「は、はいっ！」

それでは授業を始めます。みなさん——」

静まり返った教室に山田先生の声が響き、授業が始まった。

◇

時間は経って休み時間、一夏は理解している範囲だったので質問は

無し。

「はぁ、専用機か

…：そういうや裕樹のはどうなるんだ？」

「俺のは気にするな、少なくとも専用機に乗った一夏よりは強いかな」

「…：やっぱり、ヒデエ」

今はこうして雑談を楽しんでいる。
そこに、邪魔者が1人やってくる。

「さっきの話を聞いて安心しましたわ！

クラス代表決定戦！わたくしと貴方達では勝負が見えていますけど、

流石にわたくしが専用機、貴方達は訓練機ではフェアではありませんわね」

「…：お前も、専用機っての持ってたのか？」

「ご存じ無いの？…：庶民の貴方達におしえて差し上げましょう。

この、わたくしセシリア・オルコットは——」

様々な情報を集めてきてくれるエド・ワイズによれば、

【IS「ブルー・ティアーズ」は遠距離狙撃戦を主体とした機体で、6つのビットーブルー・ティアーズを操作出来る為、一対多を得意とする。

理論上はビットから発射されるビームは偏向出来て、

その動きまでもコントロールできるそうだが、稼働効率が悪く実現できていない。

操縦者は稼働効率の向上に日々努力しているそうだが、結果はまったく出ていない様だから、机上の空論状態だな。

もしビーム偏向が出来たとしても、お前さんとハスラー・ワンには到底及ばない。

遠慮無く、撃破してやれ。

——エド・ワイズ】

との事だ。俺の方は問題無い。

しかし、一夏の方は問題だ。何せIS稼働時間は20分程しかない。どうせ、専用機が来るんだ。ISの操縦はそこそこにしておいて剣道の感覚を思い出させないとな。

「——専用機を持つ者は、

全人類60億の中でもエリート中のエリートなのですわ！」

『そうか、人類って今60億超えてたのか…』

「そこは重要じゃないでしょう!？」

貴方達! 本当に馬鹿にしていますの!？」

「いや、全く」

「……………」

俺は完全に馬鹿にしているので黙って置こう。

「まあ、このクラスで代表にふさわしいのはわたくし、セシリア・オルコットであると言う事をお忘れなく」

ふう、やっと帰ったか。やっと飯が食える。
さて、昼は何を食おうか。

朝は和食だったからな、洋食にしようかな？

いや、天津飯も捨てがたいな。まあ、中国で出来た物じゃないが。

そんな事を考えていると窓側の席付近から凄まじい音がした。
たしか、篠ノ之の席の筈だが…

「腕上げたなあ」

「ふ、ふん。お前が——」

やはり、そうだったか。

どうやら、昼を皆で仲良く食べようとした一夏が

篠ノ之を連れて行こうとしてこうなった様だ、訳分からん。

「……………箒」

「な、名前で呼ぶなど——」

「飯食い行くぞ」

「お、おい、いい加減に——」

「じゃあ、俺も付いてくわ」

「おう、いいぜ裕樹」

「お前ら、人の話をっ！」

「黙って付いて来い」

「……………」

ブスっとしたままの篠ノ之を一夏が引っ張り、俺がその後を付いていく形で食堂へ向かった。

◇

数分経って今は食事中。

途中で一夏が篠ノ之を上げて落として篠ノ之が不機嫌になった。以上。

「そーいやさあ」

「……………なんだ」

篠ノ之が味噌汁に口をつけながら返事をする。

「剣道の相手をしてくれないか？」

「…いきなりなんだ」

「いや、裕樹が剣道の相手を探しておけって言うから…俺に心当たりはお前しかないし」

「そ、そうか…」

「……で、なんで剣道の相手なんだ、斉藤」

「そう、それは俺も聞きたかった」

「裕樹でいい」

一夏が昔剣道をやっていたのが分かってたからだ。

それに、1度経験している物の方が位置から覚えるより短期間で済むし、

一夏の専用機は恐らく近接メインの機体になる様だからな」

「：別に、裕樹が剣道を教えればいいだろう」

「俺は一剣道は（．．．）得意じゃないんでね」

「へえ、そうだったのか。」

まあ、何にせよ来週の勝負に何も出来ないって事にはならないな
！」

「今日の放課後から特訓を始める。

2時間ほど経ったら剣道の試合を始める、いいな？」

『ああ、わかった』

異口同音で答えられた。

仲が良いんだな、こいつ等。

◇

放課後、ISアリーナで特訓が始まった。

今日のところは基本動作だけ、ブレードを使った模擬戦は次回からだ。

今は歩行などが一通り終わった所だ。

「そんなもんだろう。次、簡単な飛行だ。飛んでみろ」

「えーと…こんな感じか？」

と言って飛んだのはせいぜい30cm。

「それじゃただ浮いてるだけだ、こうやれ」

一夏の横に付き、そのまま上昇。遮断シールド近くまで上昇し、そのまま下降。

「と言っても、所詮はイメージだ。相手が先にいると思って飛べ」

「わかった」

剣道をやっていたからか、動きが直線的なのは否めないが飲み込みが早い。

なぜか通常飛行が出来ないようだが。

「今の感じだ、まだ打鉄に振り回されている感じがあるがな」

「はあ、手厳しいな家庭教師殿は」

「それが俺の仕事だからな。」

…そろそろ着替えて剣道場に移動しろ」

「わかった」

そのまま打鉄を装着解除し、2人で剣道場に向かった。

なぜ俺もかというと、「一緒に教えてやろう」と篠ノ之が言ったせいだ。

剣道はやつても戦場では役に立たないからなあ、剣術ならやってるんだが。



「どういうことだ」

「いや、どういうことって言われてもなあ」

どうも、一夏です。

現在、箒にコテンパンにやられた所です。

「ああ、言っていなかったか、コイツは中学は帰宅部だったんだよ。

で、近接タイプのISの操縦には剣道の感覚を思い出させれば良いから

剣道の相手を探すよう言っておいたんだ」

「そうだったか…

いや、ISを使うならまだしも、剣道で男が女に負けるなど…

……

悔しくはないのか、一夏！」

「いや…格好悪いとは思うけど――」

「格好！？格好を気にしている場合か！」

そのまま箒が竹刀をこっちに振り下ろして…って冗談じゃない！

バシンッ！

「頭に血が昇りすぎだ、篠ノ之。」

相手は面を外してるんだ、危険な真似はやめろ」

横で素振りをしてた裕樹が防いでくれた様だ

…って、片手かよ！？箒は両手で体重も掛けてるんだぞ！？

何でビクともしてないんだよ！？

「あ、ああ。すまかった一夏。それと、ありがとう裕樹」

「別に気にしてないから気にすんな」

「礼を言われる事じゃないさ」

竹刀を腰に戻しながら裕樹が言ったが、かなりカッコイイ姿だったな。

「…今日の所はこの位か、じゃあ解散だ」

こんな感じで一週間が経ち、いよいよクラス代表決定戦の日となった。

第五話（前書き）

ハッハー！

テスト期間中に書いてたやつだぜメルツエエエエエエル！！！！

第五話

『……………』

現在、ISアリーナのBピットに一夏、箒、俺が待機している。
管制室には織斑先生が待機している。

全員が沈黙したまま待機している。それは何故かと言ったら……

「何時になったら俺のISが着くんだ！」

「もう5回目だぞ、一夏！」

「そう焦るな、イメージトレーニングをしてろ」

そう、一夏の専用機が到着しないのだ。

既にオルコットはIS「ブルー・ティアーズ」を展開、アリーナで待機している。

「はあ…まあ、少しでもISに慣れて良かったぜ」

「と言っても、専用機の方が高性能だから

そのままの機動で十分かどうかは分からないがな。

まあ、体験してるだけで少しは変わるからな、慣れただけマシさ」

一夏の場合はISを使用した模擬戦でそこその技量を覚えさせた。
これで少しは戦いがマシになるはずだ。

それでも、近接型と遠距離射撃型の相性の悪さを克服出来る訳じゃないが――

「織斑くん！織斑くん！織斑くん！」

3回も言うのは慌てていると言う事ですね、山田先生。

「山田先生、落ち着いてください」

「は、はい…」

山田先生は、そのまま数回深呼吸をして息を整えた。

「それですね、織斑くんの機体が到着しました！」

その声に答えるかのようにピット搬入口の分厚い防壁扉はゴゴンツという重低音を響かせ斜めに開いていく。

「これが…」

「はい！織斑くんの専用IS『白式』です！」

真っ白…と言うには灰色っぽいが、それでも初期設定の機体にしては白い。

両肩の非固定浮遊部位や腕など所々に青のラインが入っている。
アンロック・ユニット

「（白と青…黒と赤の俺とは間逆の色使いか…）」

そんな事を考えている間にどんどん準備が進む。

「織斑、すぐに装着しろ。
フォーマット フィッティング
最適化と最適化は実戦でやれ」

一夏が白式の触れて何か考えていた用だが、すぐに装着を始める。

「背中を預けるように、そうだ、あとはシステムが最適化する
…斉藤、お前もISを展開しろ」

「了解。…ハスラー・ワン展開」

声をかけ、ハスラーを通常モードで展開する。

体が宙に浮き、その後にISが全身に装着される。いわゆる全身装
甲^{キン}だ。

本当は声を出す必要はないが、まあ、雰囲気だな。

「おわ、でかいな裕樹のIS」

「名前は『ハスラー・ワン』だ、よろしくな」

「織斑くん、斉藤くん。

セシリアさんの機体は『ブルー・ティアーズ』、遠距離射撃型の
ISです。

2人とも、がんばってください」

『了解』

「箒」

「…なんだ」

「…行ってくる」

「ああ、勝って来い」

一夏が箒に話しかけたか、なら――

「行けるな、一夏」

「ああ、絶対に勝ってやる」

「じゃ、行こうか」

一夏、俺の順でカタパルトから射出、アリーナへと躍り出た。



「…えーと、織斑先生？」

「何かな、山田先生」

「織斑くんの『白式』が第三世代なのは分かりますが…
齊藤くんの『ハスラー・ワン』が第一世代（・・・）
と言うのはどういう事なんでしょうか？」

「データによればUN-100のカスタム機だそうだ。

…しかし、この数値が本当なら大事だな」

「第三世代と同等、ないしそれ以上のスペックですからね」

「それに、恐ろしいのは斉藤の操縦と武装だな。
試験で翻弄された上に、近接ブレードも破壊されたからな」

「ええっ！そんな武器が搭載されているんですか！」

「とりあえず、拳銃タイプの奴が2丁と武装腕部があるな。
ちなみに、破壊したのは拳銃タイプの武器だったな」

「…一体、どういう事何でしょう」

「まったくな」

2人のつぶやきは誰にも聞かれずに消えていった。

◇

裕樹の機体、ハスラー・ワンだったか、かっこよかったな。
白式もあんな風にかっこよくなればいいなあ…

「あら、逃げずに来ましたのね」

いつもの腰に手を当てたポーズでセシリアが挑発してくる。
そんな事には目もくれず、俺はブルー・ティアーズのデータをチェックする。

特徴的なフィン・アーマーを四枚背に従えて、その手に持つのはスナイパーライフル。

白式が検索してくれた内容によると、

67口径特殊レーザーライフル《スターライトmk?》らしい。
その全長は2メートルを越すが、ISは宇宙空間での運用が想定されていて、

基本的に空中で浮いている為、このような事は珍しい事じゃない。

「自分で買った喧嘩だ、逃げる方が可笑しいな」

裕樹は裕樹で挑発し返している。

そしてセシリアがこちらの機体データを見たとき、とたんに笑い始めた。

「クスクスクス…あなた、そんな機体でよくそんな事が言えますわね。」

わたくしと同じ高さまで上がってこれない第一世代型の使い手さん?
ん?

「ふん、その鼻、今にへし折ってやるさ」

…ん? 第一世代型? たしか、打鉄が第二世代型だから…それより前なのか?!

だったら訓練機を貸してもらえば良かったじゃないか! 勝つんじゃないのかよ!

「一夏、これはプライベートチャネルだ。今回は返事をしなくていい。」

これはお前の試金石だ。まず、お前が突っ込め。俺は射撃援護に回る。

くれぐれも周囲の警戒を怠るな、アイツが狙撃銃1本で来る筈がないんだからな」

どうやら裕樹は俺を試す気らしい。

反論しようにもプライベートチャネルでの会話はまだ出来ない為反論できない。

声を出したら、地獄の様な訓練をやらされるんだろう。それは嫌だ。

「…最後のチャンス差し上げますわ」

「チャンスって？」

「代表候補生の乗った第三世代1機と、

初心者が乗った第三世代が1機と—古い時代の遺物（第一世代）が1機では、

わたくしが勝利するのが自明の理。

ですから、今ここで謝るのであれば許して——」

「断る」

人の台詞は最後まで聞こうぜ、裕樹。

…!?!?!? なんか、急に鳥肌が物凄く立った。原因は…裕樹だ。

裕樹が何とも言えないプレッシャーを放っている。

あれが裕樹の本気…なのか…?

そのプレッシャーを受けてか、一拍遅れて左目の射撃モードへの以降と、

レーザーライフルのセーフティロックが解除されたと言う警告が出る。

「…そう、残念ですわ。それでは——」

——警告！敵IS、射撃モードに移行。トリガー確認。初弾エネルギー装填確認。

白式から警告が出る。しかし、狙いは俺じゃない。
つまりは、裕樹にロックが行っている。

「裕樹！逃げろ！」

「お別れですわねっ！」

俺が裕樹に叫ぶのと、セシリアがレーザーライフルを撃つのはほぼ同時だった。

キューインッ！という音が鳴り、裕樹のハスラー・ワン目掛けて閃光が走る。

よける暇も無くレーザーは裕樹に直撃し、着弾の衝撃で砂が舞い上がる。

そして、砂の煙幕が晴れた時、俺はもちろん、セシリアや、アリーナのギャラリィ、

果ては、管制室にいる山田先生や千冬姉すら驚く事となる。何故なら――

「まさか、その程度でこのハスラー・ワンが沈むと思ったか？」

そう、裕樹……ハスラー・ワンは文字通り無傷でそこに居たのである。

第六話（前書き）

いやー、最近雨がひどいですねえ。

今は丁度激しい雷雨ですよ、たまらんね。

そんな感じで第六話、どうぞ。

第六話

「…一体何なんですよ、ソレは」

「ISさ。」「一夏、何をぼさっとしている。早く攻撃を開始しろ！」

「…レーザー兵器の直撃を受けてダメージを受けないなんて…」

「でええええやあああああ！！」

「！…人が話している時に攻撃するのは――」

一夏が近接ブレードを展開し、セシリアに切り掛かるがギリギリでかわされる。

「立派な戦法だ。…それにお前、背中がガラ空きだ」

一夏に意識が集中しすぎた為、セシリアがこちらの攻撃をかわすのが一拍遅れる。

その一拍の内に両手に装備したハンドガンから計6発の実弾を叩き込む。

撃ち出された弾丸は両脚部装甲に命中し、装甲に罅を入れる。

本来であれば大抵のISの装甲なら容易く砕く威力なのだが、IS学園内でAC用の火器をそのまま使うわけには行かない為、炸薬量を減らし、威力を大幅に下げた物を使用しているため、罅が

入っただけだった。

「ぐっ！……り、両脚部装甲に罅！？なんて威力なんですか？！」

「〔一夏、アイツの機動性を低下させた。

ここら辺で俺は待機させてもらう。後はお前に任せる〕」

一夏の目を見ながらプライベートチャンネルで話し掛ける。

一夏も「分かった」と言わんばかりに頷き、近接ブレードでセシリアに向かっていく。

さて、セシリアの意識も一夏に集中した様だから俺はステルスで隠れてチャンスを探おうか。

◇

裕樹に任せられてから25分、試合開始からは27分。

状況は、

白式…シールドエネルギー残量…100、実体ダメージ…中破。

ブルー・ティアーズ…シールドエネルギー残量…300、実体ダメージ…中破。

やっぱり射撃型の敵にはとことん相性が悪い。

裕樹の脚部攻撃のダメージと機動性低下のおかげで、何とかシールドエネルギーを300削る事が出来た。

しかし、裕樹の予想通り、セシリアはまだ武器を隠し持っていた。

自立機動兵器「ブルー・ティアーズ」。それを4基。
機体と同じ名前なのは、この特殊兵器の名前を機体の名前にしたからだそうだ。

「27分、よく持った方ですわね。褒めて差し上げますわ」

「そりゃどうも……」

「このブルー・ティアーズを前にして、初見でここまで損害を与え、耐え抜いたのはあなた達が始めてですわね」

『達』と言われても、裕樹の方はどこかへ消えた。

アリーナからは出れない筈だからこの中にいる筈なのにセンサーに反応は無い。

「さあ、^{フィナーレ}閉幕と参りましょう」

笑みと共に、右腕を横にかざすセシリア。

すぐさま命令を受けた2機のブルー・ティアーズー以下ビットと呼称ーが飛んでくる。

「…くっ！」

ビットがレーザーを放ち、それを回避するとセシリアがライフルで攻撃してくる。

このパターンに入らないように努力しているが、さすがは代表候補生、1週間程の付け焼刃じゃ全然通じない。

ビットが凄まじい数のレーザーを放ってきた為前方に加速して回避すると――

「いただきますわ！」

セシリアがライフルを構えて待ち構えていた。
そのまま加速しながら回転を加えて突撃する。

「弾道を中心として早く回転しろ」と裕樹からこの飛行法を教わった。

『負荷が掛かり過ぎるからあまり使うな』と言われていたが、仕方ない。

絶対に負ける訳にはいかないのだ。

狙い通りに直撃を避け、セシリアに体当たりする。

「なっ：！？無茶苦茶しますわね。けれど、無駄な足掻きっ！！！」

空いている左腕を振って周りの空間で待機していた2機のビット
ービット1と2と言う事にしようーをこちらに向けて飛ばしてきた。

そうか、そういう事だったか。理由が分かれば――

「でりゃあああああ！！！」

レーザーの中を切り抜け、ビット1に一閃。手には重い手応えを感じる。

切り裂かれたビット1はそのまま爆散する。

「なんですって！」

驚愕するセシリアを他所にビット2を撃墜する。

「…………っ！」

焦ったのか、ビット3と4をこちらに向けてくる。
しかし、弱点はもう分かっている。

「無駄だぜ、この兵器は毎回お前が命令を出さないと動かない。
しかもその時お前はその他の攻撃が出来ない。
そうしないと制御しきれないからだ。違うか？」

「…………っ！」

ヒクヒクと目尻を引き攣らせてこっちを見るセシリア。どうやら凶
星だった様だ。

ISの全方位視界接続は文字通り全方向を見渡す事が出来る。
しかし、それを扱う人間が普段見渡せない真上や真下、真後ろは
どうしても反応がコンマ数秒遅れる。

セシリアはそのコンマ数秒を突いてきている。

逆に言えば反応の遅れを態と作ってしまえばそこに攻撃を誘導でき
るのだ。

「(……後は集中するだけだ)」

見た所、セシリアは近接武装を展開していない。

『待機状態』にしても踏み込まれてから展開じゃ遅すぎる。

俺は見え始めた勝機に胸を躍らせた。



「はあ……凄いですねえ、織斑くん」

ピット内の管制室でリアルタイムモニターを見ていた山田真耶がつぶやく。

1週間集中的に操縦したとはいえ、代表候補生相手にシールドエネルギーを

300ほど削ると言う事は大健闘と言っている。

「織斑がともに戦っているのも、斉藤がオルコットの機動力を削いだからだ」

そう、まともな状況じゃこうはならない。

ここまでセシリアが追い込まれたのも機動力の低下が原因だ。

「そういえば、斉藤くんは何処に言ったんでしょうか……
センサーで探しても反応は無いですし……」

「恐らく、光学迷彩とジャミング系統の出力を最大にしてジッと隠れているんだろう。」

……それでも、恐ろしい程の欺瞞装置カモフラージュシステムの出力と忍耐力だな」

「でもこのまま織斑くんが勝ってしまいそうですね」

「いや、あの馬鹿者は浮かれている。

アイツが浮かれた時には大抵単純なミスを犯す」

「よく分かりますね」

「よく見ろ、アイツが左手を閉じたり開いたりしている筈だ」

「へええ、さすがご兄弟ですね——」

真耶と千冬が話している時、同じく管制室にいる筈はモニターをジッと見ていた。

「（一夏……）」

筈がそう思った時、試合が動いた。



最後の1機を切り裂いてセシリアに肉迫する。

ライフルは他の方向を向いていて、今から照準を合わせるのは不可能。

「もらったあああああ！！！！」

この一撃が決まればもう勝利は近い。しかし——

「——かかりましたわ」

セシリアがにやりと微笑む。危険を感じて逃げようと思ったが、もう手遅れだった。

ガシャン！

ブルー・ティアーズの腰部のスカート状のアーマー、それが可動し、2つの砲身が姿を現す。

「お生憎様、ブルー・ティアーズは6基あってよ！」

その言葉と共にビットから発射されたのは弾道型^{ミサイル}。
追尾機能があるため回避も出来ない。

ああ、裕樹の行ってた通りもつと警戒してたら良かったんだろうなあ…。

着弾の寸前、突然ミサイルが爆発し俺はその爆発に巻き込まれた。



セシリアと一夏が戦い始めてから特殊潜行状態に入っていたが、
一夏がセシリアの思惑にまんまと引っ掛かった事で中断せざるを得なかった。

ダンッ！ダンッ！

ステルスを解除し、アリーナの端から実弾ライフルでミサイルを打ち落とす。

一夏が爆炎に巻かれるが、そろそろ一次移行^{ファーストシフト}が起きるから心配無いだろう。



「一夏っ!!」

モニターを見ながら箒が叫ぶ。

その傍らで、千冬は平然とその光景を見ていた。

「…ふん、機体に救われたな、馬鹿者が……」

その言葉には言葉通りの「呆れ」とそこに隠れた「安堵」があった。



——フォーマットとフィッティングが完了しました。確認ボタンを押して下さい——

訳も分からずにそれを押すと、白式が大量のデータの整理を始める。数瞬後、俺の全身を包んでいる白式が輝き、その形を変えていく。

「これは……」

灰色がかっていた色は白式の名の通り純白に変化し、機体の実体データは消え、
工業的なデザインのフォルムは曲線を描くフォルムへと変化していた。

「ま、まさか……ファーストシフト一次移行!？」

あなたは初期設定の機体で戦っていたと言うの!？」

セシリアの言葉を聞き流しながら武装を確認する。
相変わらず、武装は1つだけ。

―近接特化ブレード、『雪片式型』―

雪片、それは千冬姉が現役時代、専用機に唯一積んだ武装の名称。
式型と言う事は、雪片の改良型なのだろう。

……今まで千冬姉が守ってくれていた事をつくづく思い知らされる。

「…俺は世界で最高の姉さんを持ったよ」

でも、守られるだけはこれで終わり。

「俺も、家族を守る。」

……とりあえずは、千冬姉の名前を守ってみせる！」

「さっきから何を……ああ、もう！」

自棄になった様に2基のビットを飛ばしてくるセシリア。

しかし、その片方は中間地点で裕樹に落とされる。

もう片方は此方に向かってくるが、俺は喰らわない。

さっきまでなら喰らったかも知れないが、今は一次移行が終わって
いる。ファーストシフト

さっきまでよりも遥かに使いやすくなっている。

「てえあっ！」

ビットを斬りつける。

両断されたビットは爆発するが、俺は既にセシリアに肉迫している。

「おおおおおっ!!」

どんどん手の平、雪片式型にエネルギーが集中していく。
次の瞬間には、雪片式型に新しい刃が出現した。

「（いける!）」

セシリアの懷に潜り込み、逆袈裟切りを放つ――
――が、セシリアに当たる寸前でブザーが鳴る。

〔織斑一夏、シールドエネルギー0。撃墜〕

『えっ……………?』

ふとシールドエネルギー残量を見ると、白式は0、ブルーティアー
ズは250。
いつの間にか残量が0になっている。裕樹と千冬姉はやれやれと言
った感じだ。

そう、間違いなくこの試合、俺は負けた。



全く、もう少し考えてから行動しろと口が酸っぱくなるほど言い聞
かせたのに……
まあいい、それよりとつとこの試合を終わりにしないとな。

「何があつたか知りませんが……残るはあなただけですわね！」

「シールドエネルギー残量が少ないのによくそんな事が言えるな」

「シールドエネルギーがあらうと、まともに飛べない化石には負けませんわ！」

「残念ながら、飛べるんだなあ……これがっ！！」

「っ！？」

PICとメインブースター、さらにスラスターを使い、上空で静止しているブルー・ティアーズに突撃する。

ライフルを持っている為、大きく左に避けて此方に照準を合わせてくる。

これで準備は完了。アクティブ・シールド可動防壁のミサイルハッチを開き、水を積んだミサイル10発をブルー・ティアーズに向けて発射する。

「その程度で当たると思っていますの！」

もちろん、ライフルでミサイルを迎撃する。

これが実弾であればさほど問題は無かったが、あのライフルはレーザーを撃ち出す。

つまり、その熱量とミサイルの爆発で水が気化して水蒸気が発生する。

ミサイルの溶けた断片も混じった水蒸気は、センサー・レーダー系に異常を与える他、

レーザー等のエネルギー兵器の威力、射程を著しく減衰させる。

もちろん、こうなる事は知っている為、自分是对策を打ってある。

「なっ！？…水蒸気！この程度何ともありません…っ?!
威力が、それにセンサーまでっ?!?!」

「チェックメイトだ！」

ダンダンダンダンダンダンダンダンダン!

ライフルを10発ほど叩き込んだ所で、
ブルー・ティアーズのシールドエネルギーが0になる。

「試合終了。勝者、織斑・斉藤ペア」

試合終了を告げる審判の声。

一夏は雪片式型の使用で自滅したが、結局は俺達が勝つ事は目に見えていた。

相手が驕っている奴ほど、咄嗟の機転が利かないから
このような攻め方をすればすぐ終わる。

それにしても『雪片式型』か、束も厄介な物を作ってくれたものだ。
恐らく、雪片式型は武装のテストとして作った物だろう。

ただでさえエネルギーをバカ喰いする白式にエネルギーを喰う雪片
式型。

一体アイツは何がしたいのだろうか……

第六話（後書き）

作者「ヒヤッハー！ACVのCBT当選だー！

やっぱり楽しいぜ、メルツエエエエエエル！！！」

裕樹「やかましいわ！！」

ドゴンッ！

作者「グハッ…イイツ！！」

裕樹「駄目だコイツ、早くなんとかしないと…」

作者「まあ、ギャグは置いといて、

雷でPCに被害が出ないうちにお開きにしたいと思います」

裕樹「そうだな、じゃあこの辺でさよならだ。

また次回も見てくださいな！」

第七話（前書き）

ヒヤッハー！

課題終わって無いぜメルツエエエエル！！！！

一度データ吹っ飛んで絶望しました。

そして初の21KBという大容量。

ガンバ！

第七話

試合は俺とセシリアが負けて裕樹が勝った。

今は裕樹と共にピットに戻った方がいいが、千冬姉達に怒られている。

「よくもまあ、持ち上げてくれたものだ。」

それでこの結果か、大馬鹿者が」

馬鹿者から大馬鹿者へランクアップ。

クズとかにランクダウンしてないのは千冬姉らしい。

「まったく…武器の特性をろくすっぽ確かめもせずに使うからあなるんだ。」

今まで口を酸っぱくしてきたが…今回の事で身をもって知った筈だ。

これからは訓練を継続、それと暇があればISを起動しろ、いいな？」

「ああ、わかったよ…」

……なあ、でもなんで急に白式のSEが0シールドエネルギーになったんだ？」

「…織斑、『雪片式型』の能力は何だ？」

「ええつと……『バリア無効化攻撃』…です」

「じゃあ、後は俺が……」

『雪片』の能力がそれだ。

あいてのSE残量に関係なくバリアを切り裂いてIS本体にダメージを与えられる。

じゃあ一夏、その場合相手はどうなる？」

「……ISの絶対防御が発動してSEが大幅に減少する…ってまさか！」

「そう、『バリア無効化攻撃』はその効果の代償に膨大なエネルギーを必要とする。

つまりは——」

「雪片式型一本に供給されているエネルギーじゃ足りないからSEまで攻撃に転化させて必要分を賄ってるって事だな」

「そういう事だ」

「まあ、本来拡張領域用^{バースロット}に回す筈の処理を全て使って

雪片を振るっているんだ、その威力は全IS中でもトップクラスの筈だ」

「はあ、でも射撃武器の1つでもあったら——」

そう呟いた途端、千冬姉に更に怒られる。

「お前の様な素人に射撃戦闘などできるか。

反動制御、弾道予測、斜線確保、間合いの調整と維持、

一零停止、特殊無反動旋回^{アフソリユート・ターン}、弾丸の特性、大気の状態、

敵の武装や地形などによる影響を含めた思考戦闘

……まだまだ出てくるぞ。お前はこれが出来るのか？」

「……ごめんなさい」

「お前は私の弟だ、1つの事を極める方が向いているさ」

千冬姉には珍しく優しい。

まあ、ともかく急いで強くならないと。

そう、急ぎ過ぎないように……………

◇

サアアアアア……

シャワーノズルからはお湯が噴き出す。

その水滴がシャワーを浴びる彼女―セシリア―の肌に当たっては弾け、

そのボディ―ラインをなぞるように流れていく。

白人にしては珍しく均整の取れた体、その流線美は彼女のちよつとした自慢だ。

しゅっと伸びた足はそこいらのアイドルより勝っており、

胸は―同世代の白人女子と比べれば―幾分か慎ましいが、

それが全身のシルエットを整えている要因である為本人としては複雑な心境らしい。

（日本女子と比較すれば慎ましいどころか充分どころか大きい程なのだが）

そんな彼女はシャワーを浴びながら物思いに耽っていた。

「（今日の試合……わたくしが勝って、負けた。」

いいえ、ほぼ負けでしたわね」

いきなり一夏のSEが減っていなければ自分は負けていた。
いや、あの両足への攻撃を受けた時点で負けはほぼ確実で――

「一勝出来ただけ僥倖、ということかしら」

片や戦闘中は殆ど消えていて、もう片方はがむしゃらに攻撃してく
るという

タッグでもなんでもない戦い方の2人、そんなものに……負けた。
だがしかし――

「(何だか、すっきりとしましたわ)」

国家代表候補生である以上、それ相応の力を持たなくては話になら
ない。

彼女にとって国家代表候補生という地位はどうしても必要な物。

3年前に両親が事故死し、若くして両親の経営していた会社と、
両親の莫大な遺産を手に入れてしまったが為に付き纏う金の亡者達。
政府からの代表候補生の国籍保持の為に出された好条件の1つ。

「セシリア・オルコット以外の遺産相続について、国はこれを一切
認めない」

これがどうしても必要であった。

だから血の滲む様な努力を重ね、今の強さを手に入れた。

しかし、強くなっていけばいく程に自分が強いのか分からなくなっ
てきた。

だが、この試合ではっきりとわかった。

自分は強くて弱い、まだまだ強くなれる……と。

「織斑、一夏…そして…：齊藤、裕樹」

2人の名前をそつと呟く。

そして生まれる熱く、甘く…しかし切ない気持ち。

思っただけで胸をいっぱいにするこの感情は一体何なのだろう。

「（お2人について知りたい…

もつともつと…）」

浴室には水の流れる音と若干くぐもった可愛らしい唸り声が響いていた。



翌日、朝のSHRで俺は予想していなかった事態に直面していた。
ショートホームルーム

「——と、いう事で1年1組のクラス代表は織斑一夏くんに決定です。」

あ、一繋がりでいい感じですね！」

うん、たしかに繋がって——ってそうじゃない、一番大事なのは！

「先生！」

「はい、織斑くん」

念の為、手を挙げてから質問する。出席簿アタックは喰らいたくな

い。

「俺は昨日の試合でビリだったんですよ？」

それなのになんで俺なんですか？

順当にいけば裕樹のはずなんじゃあ…？」

「ああ、それは――」

『俺（わたくし）達が辞退したからだ（ですわ！）』

立ち上がり、腰に手を当てたいつものポーズのセシリアと、椅子に座ったまま立ち上がらず、腕を組んで目を瞑る裕樹。

というか、なんで辞退したんだこの2人？

セシリアに至っては昨日までの怒った感じとは違い、上機嫌だ。

「まあ、個人自体ではあなたの負けでしたが、それは考えてみれば当然の事。

なにせわたくし『セシリア・オルコット』が相手だったのですから、

仕方の無い事ですわ」

事実として負けているから何も言えない。反論できないのが悔しすぎる。

「それでまあ、わたくしも大人げなく怒った事を反省しまして

一夏さんにクラス代表を譲る事にしましたわ」

「それにお前の実力をつける目的もある。

訓練もやってはいるが、一番の近道は実戦を繰り返し替える事だからな。

だからお前にクラス代表を譲ったのさ（面倒は嫌いだしな）」

…くそう、まとも過ぎる理由だから言い返せねえ。

でも裕樹は絶対『面倒臭いから』とか考えてそうだな。

それに…セシリアが俺を名前で呼んだか？

「いやー、セシリアわかってるねー」

「せっかくの男子なんだから持ち上げないとね」

「私達は貴重な経験を積める。織斑君はさらに強くなれる。

他のクラスの子に情報売れる。よく考えてるね、斉藤君は」

「ちょっと待て！人の情報を勝手に売るなよ！」

「…自分の情報ぐらい、自分で何とかしろ」

「あー、確かに斉藤君の情報が殆ど無くて困ってるんだよねえ…教えて？」

「断る。知りたいなら対価を渡すんだな」

…なんか教室中がカオスになってる。そういえばまだSHR中じゃあ——

「座れ、馬鹿者共！」

出席簿をもって注意する千冬姉。もはや脅迫だろうな。

「クラス代表は織斑一夏、異存は無いな」

「…はい」

「次はグラウンドで実習だ、遅れるなよ。では、解散！」



「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらう。
織斑、斉藤、オルコット。試しに飛んでみる」

「了解」

そのままハスラーワンを展開。展開は瞬間的に行われる。
それはセシリアも同様で、既にブルー・ティアーズを纏っている。

「早くしろ。熟練したIS操縦者なら展開まで一秒とかからないぞ」

一夏はいつも通り怒られる。まあ、昨日の今日だから当たり前か。

「3人とも展開したな？よし、飛べ！」

指示通り空へ飛び立つ。順番はセシリア↓一夏↓俺の順だ。

しかし、一夏のスピードが遅い。メインブースターを吹かして一夏に近づく。

時を同じくして先行していたセシリアがスピードを下げて近づいてくる。

その矢先に一夏へお叱りの言葉が出る。

「何をやっている織斑。ハスラーワンはともかく
スペックなら白式の方が上だぞ」

…ともかく？ ああ、そうだった。

コイツのスペックデータを間違えたと言って下方修正したデータを正式なデータとして書き換えてもらったんだった。

（最初に渡したのは戦闘モードを起動し、

その他の環境が完全にそろった場合のデータ、所謂カタログスペックという奴だ）

書き換えるなら簡単に出来るが、話が合わなくなるとまずいから仕方なく織斑先生に事情（嘘）を話したんだが…：酷い目にあった。よもや正座で1時間とは、恐れ入った。これからは慎重にいこう。

「自分の前方に円錐を展開するイメージって言ったって…：」

「一夏さん。イメージは所詮イメージですわ。

そこで躓いているより、自分にあった方法を模索する方が建設的でしてよ？」

「そう言われてもなあ…：第一、空を飛ぶ感覚自体があやふやなんだよ——」

「じゃあ、訓練決定だな。

と言っても誰かに頼むかもしれんが」

「で、でしたらわたくしが——」

「織斑、斉藤、オルコット、急降下と完全停止をやってみろ。

目標は地表から10cmだ」

「了解」

「了解ですわ、ではお2人ともお先に失礼しますわ」

そう言うが早いか、セシリアは加速しながら着地する。
どうやら成功したようだ、さすが代表候補生。

次は――

「次はお前だ、一夏」

「な、何でだよ」

「いやな予感しかないからな。
なにかあったら引き止める」

「…わかった。じゃあ行ってくる」

そして、地面に向けて急加速。

…いやな予感的中。急いで急降下し追いかける。

「（いちいち世話の焼ける奴だ……）」

「うわあああっ！！」

そしてギリギリの所でキャッチし、急減速。

PICだけでなくメイン・サブブースター、

各部スラスタも使用したため辺りに砂煙が舞い上がる。

この急減速は、普通だったら気絶するGが掛かるのだが
ISにはブラックアウト防止の装置が付いている為問題ない。

「まったく、もう少しで地面とキスする所だったぞ」

「面目ない……」

「ケホケホ……お2人とも大丈夫ですよ?!」

砂煙を押し分けてセシリアが近くまでやってくる。

「俺は問題ない」

「俺も」

「それは何よりですわ……ケホ」

楽しそうに微笑を浮かべるセシリアだったが、砂煙の中の突っ切ってきた為まだ咽ているようだ。

少しして砂煙も沈静化して来た時、近づいてくる生徒が1人。

「ISを装備していて怪我をする筈が無いだろう、それに斉藤がフォローに入ったんだ、それ程酷い事にはならないと思うが」

「うふふ、篠ノ之さん？」

たとえISを装着していようが他人を気遣うのは当然、いえ常識でしてよ?」

「お前が言うか、この猫かぶりめ」

「鬼の皮をかぶっているよりマシですわ」

2人の間にバチバチと音を立てる火花が見える。今にも取っ組み合いのケンカが始まりそうだが、そこへ織斑先生が

入ってくる。

「おい、馬鹿者ども。授業の邪魔だ、終わってからやれ。

…織斑、斉藤、オルコット、次は武装を展開しろ。まずは織斑からだ」

「は、はい！」

「では、はじめろ」

ちゃんと正面に人が居ない事を確認してから武装を呼び出す一夏の配慮が出来ているのはいいのだが、武装の展開が遅い。

「遅い、0.5秒で展開できるようになれ」

「わかりました、織斑先生…」

まあ、普通に生きて来て急に武器のイメージをしろと言われても出来ないだろう。

そういう意味なら上出来だ。戦うのならそんな事は関係ないが。

「次はオルコットだ」

「はい」

右手を肩の高さで横にかざす。

一瞬の閃光の後、狙撃銃《スターライトmk.？》がその手で握られている。

既にマガジンが接続されており、セシリアが視線を送る事によってセーフティが外れ射撃可能になる。

一秒と経たずに射撃可能になっているのはいい。
しかし、どうしても無視できない事が一つだけある。それは――

「流石だな、代表候補生。」

だが、そのポーズはやめろ」

「そうだ、俺を射殺する気か？」

銃口が俺の方を向いているのである。

いくらISを装備しているとはいえ、銃を向けられるのは気持ちのいい事じゃない。

「で、ですが、これはわたくしのイメージをまとめる為に必要な――」

「正面に展開できるようにしろ、いいな？」

「はい……」

織斑先生の一睨みでポーズを変えざるを得なくなったセシリア。
まあ、まだ先は長いから今の内に直せて良かったんじゃないだろうか。

…まず第一にイギリスでの教育がどうなっていたかが気になるが。

「セシリア、近接用装備を展開しろ」

「えっ…は、はいっ！」

一瞬反応が遅れたセシリアだったが、狙撃銃を格納して
近接装備を取り出しにかかる。

「（格納も早いのか、恐れ入る。
それにしても近接装備の展開が極端に遅いな）」

やはりあまり使わない装備だからだろうか、一向に展開される気配が無い。

「くっ……」

「まだか？」

「す、すぐです。——ああ、もう！《インターセプター》っ！」

やはり、近接武装を展開する事は殆ど無かったのだろう。
さらにイギリスはどういう教育をしているんだろうか。

「……何秒かかっている。お前は、実戦でも相手に待ってもらうのか？」

「じ、実戦では近接の間合いに入らせません！ですから——」

「ほう？ 織斑と斉藤との対戦で初心者に懷を許した上に、
近距離からの射撃で決着をつけられた様に見えたが？」

「あ、あれは、その……「あ、あなた達のせいですわよ！」」

……俺達のせいじゃなく、自分のせいだろうが。

「まあいい。では、トリは斉藤だ」

「了解」

「では、始めろ」

腕は下に下げたままハンドガン2丁を展開する。
セーフティではなく、FCSのコントロール下なので自動的に撃てる様になる。

「では、ライフルを出せ」

「了解」

ハンドガンのマガジンを外し、弾薬の自動供給もカット。
装填済みの弾をコッキングで排出し、スライドをロック。
そのまま地面へ捨て、ライフルを展開する。

なぜハンドガンをそのまま格納しなかったのかといえば、
格納するよりこっちの方が早くすむから……と思わせるためだ。
それに、こちらの方がACの戦いに近い^{ラビッド・スイッチ}ため、やりやすいからだ。
もちろん高速切替も出来るのだが。

「ふむ、ハンドガンを捨てるのは余り感心しないが
…ちゃんと使用不能状態にしているのか」

「はい。その辺りは、
万が一敵がこちらの火器を使用できた場合に備えて対応しています。」

それに使用不可になった物を廃棄すれば一時的に機体の速度上昇に繋がりますし、

一定時間後に回収されるので問題なしです」

「なるほどな。む、時間か。」

今日の授業はここまでだ、各自しっかりと後片付けをする事！」

『はいっ！』



「と、言う訳で！織斑君クラス代表決定おめでとう！」

「おめでとう！」

現在、寮の食堂で1組メンバー全員＋αでパーティーが開かれている。

夕食後の自由時間ということもあり、噂を聞きつけたであろう他のクラスの女子達

（よく見れば、黄色^{2年}や赤色^{3年}のリボンが見える）

もここぞとばかりに混ざっている。

「いやゝ、これでクラス対抗戦も盛り上がるねえ」

「ほんとほんと」

ん、今相槌を打ったのは2組の女子だったか。

流石にそこまで言ったら気付くだらうに……

「はいはい、新聞部です。」

話題の新生、織斑一夏君と斉藤祐樹君に特別インタビューをに来ました！」

黄色のリボン……2年生か。

「失礼ですが、どちら様で？」

「あ、ゴメンゴメン。私は2年のまゆずみ薫子。かおるこよろしくね。
新聞部副部長やってまゝす。はいこれ名刺」

そう言って俺と一夏に名刺を渡してくる。

中々本格的な名刺だ。さすが新聞部、伊達に人を相手にしていない
と言う事か。

「まず、織斑君から。クラス代表になった感想を、どうぞ！」

「えーと――」

ボイスレコーダーを一夏に向け待つ薫先輩。

まず、と言う事はこっちにもインタビューをするのだろうか？

「じゃあまあ、適当に捏造しておくからいいとして：

次！セシリアちゃん、コメントちょうだい？」

「わたくし、こういったコメントはあまり好きではありませんが、
仕方ないですわね――」

好きではないと言いながら長話を始めようとするセシリア。
しかし薫先輩が聞く筈も無く、また捏造する事にした様だ。
そして最後は――

「はい、最後に裕樹君。

クラス代表になった織斑君に一言！」

「クラス代表、その役目お前が相応しい。万が一でこずったのなら、手を貸そう」

「おお！いい感じのコメント！これはそのまま使わせてもらおうわ。じゃあ、最後に3人の写真とらせてね？」

『3人？』

「俺は遠慮する」

学園内の新聞とはいえ、顔が映った写真を撮られるのは勘弁したい。

「なんたって注目の専用機持ち達だしね！

あ、拒否権は無いよ裕樹君」

くそう、何たる事だ。

こうなったら撮る瞬間に逃げるしかない。

「はいはい、さっさと並ぶ。

あ、3人で手を取り合うってのもいいね！」

強引にポーズを決めさせられるが、抵抗しないでおく。それにしても……

「なんだよ？」

「どうかしたのか？」

「……なんでもありませんわ！！」

セシリアがそわそわしているな。
ん？入り口にいるのは織斑先生か？

誰かに用があるのだろうか。

「じゃあ、こっちむいてー。

撮るより。35×51÷24は？」

「え、えっと……」

「74・375、単位不明」

「せいかりい」

パシャツつとカメラのシャッターが切られる。

その瞬間、1組の女子全員が割り込んでくる。

ここぞとばかりに後ろへ後退し、カメラに映らないように屈む。

「なんで皆さんが入ってますのーっ！」

「まーまーまー」

「セシリアだけ抜け駆けは無いでしょ？」

などという会話が繰り広げられている中、織斑先生が中に入ってくる。

撮影が一段落するのを待っていたのか。

「パーティーだからと言ってあまりはしゃぐなよ？お前ら」

織斑先生の乱入により、食堂内が静まり返る。

「なあに、注意しに来たわけじゃ無い。少し用事の出来た奴がいるだけだ。」

斉藤、今すぐ私について来い、いいな？」

「了解です、織斑先生」

「じゃあ、羽目を外し過ぎないようにな」

よもや俺だったとは。しかし一体何の用だろうか？

言われるままについていくと寮長室に連れて行かれた。

が、中は悲惨な事にビールの空き缶やら選択していない衣類でごっちやだった。

「……織斑先生、片付けをしましょう」

「……………ああ」

10分後、ある程度は綺麗になったので話を始める事になった。しかし、この場で思いがけない事を聞かれる事になる。

「ゴホン。斉藤、お前に話がある」

「なんででしょうか」

「……お前は何者だ？」

◇

部屋の片付けのせいで本題に入るのが遅れてしまった。しかし、斉藤も一夏並み、いやそれ以上かもしれない家事スキルを

持っていたのか。

ますます聞かねばならんな、そう――

「……お前は何者だ？」

――斉藤の正体について。

斉藤には一夏が世話になっているから強くは出れないが、これだけは確認しておかなければならない。

正直に言って、斉藤裕樹には怪しい点が多すぎる。

まず、あのIS。スペックの下方修正が申請されたが、それでも第一世代機の改造型の域を超えた性能だ。

それにあの戦闘機動。

代表候補生のオルコットを翻弄したあの機動は確実に何年も訓練した物の動きだ。

しかし、何処の軍にも『斉藤裕樹』という軍人は所属していなかった。

あのバカの関係者なのだからなにかあったと見ていいだろう。

そして、ISの武装の扱い。これも何年も訓練したような扱い方だ。使い切った武装の破棄も戦場でのソレに近い。

ざっと挙げてみただけの疑問点がある。

さて、どうくるか……

「何者と言われても、一夏の護衛兼家庭教師としか言いようが無いですね。

まあ、今は護衛が殆どですが」

「今やっている仕事じゃない。お前の生業はなんだ？」

「ご想像の通りだと思います」

「……傭兵、か」

「ご名答。」

ああ、ちなみにどれだけ金を積まれても
一夏や学園に危害は加えませんかから安心してください」

「……お前は『レイヴン』なのか？」

あの時、私と一夏と箒を助けた——」

「ええ、そうです。あの時のレイヴンは俺ですよ。」

……しかし、その事は秘密にしてください。

一夏達にも話す機会が来るまでは伝えないように。

いいですね？」

最後の問いかけと同時に凄まじいプレッシャーが私に押し掛かって来る。

一体どれだけ戦ってくればこの様なプレッシャーが出せるのだろうか。

「…あ、ああ。わかった」

「では、もうかえってよろしいですか？」

「いや、最後に1つだけ。」

最近色々な臭い。充分に気をつけてくれ」

「こちらにも情報は入って来ています。ちゃんと警戒していますよ？」

「ならいい。わざわざすまなかったな」

「いえいえ、それでは失礼します」

ガチャ……ボタン！

ふう、まさか本当にレイヴンだったのか。

それにしても、いくら調べてもレイヴンという傭兵について何も出てこないのはどういうことだ……

あのバカがなにかやっている？ いや、違うだろうな。

もっと、おおきな何かが情報を消していると見るべきか。

「あまり迂闊に踏み込まない方が賢明か。

……そういえば、入学式に間に合わないと言っていた生徒がいたな。

来るとすればそろそろか。

確か名前は……あった、

イギリス代表候補生、BFF所属『リリウム・ウォルコット』か」



「クシュッ！……風邪でしょうか」

もう1人のイギリス代表候補生リリウム・ウォルコットは現在校門

前にいた。

そしてその近くには――

「アンタ、大丈夫？」

それよりもあんたここの生徒？出来れば案内して欲しいんだけど……」

中国の代表候補生『ファン鳳 リンイン鈴音』がいた。

「申し訳ありません、私はつい先程ついたばかりなので案内は出来ません」

「なんだ、じゃああたしと同じか。」

ちようどいいからあたしと一緒に探さない？」

「はい、かまいません」

「よかった。1人だとなんか寂しくてさー！

あ、あたし鳳鈴音。あんたは？」

「申し遅れました、リリウムウォルコットと申します」

「よろしくねー！

って、あれここの生徒じゃない？」

「そのようですね」

「おーい！そのアンタ！そう！アンタよアンタ！」

「（少々強引な方ですが、悪い人ではないようですね。」

：今、鳳さんが声を掛けた方は男性でしょうか？

あの歩き方は……お兄様裕樹ですね」

織斑先生との話し合いから帰ってきた裕樹が通りかかったため、鈴が呼び止めたのだが、裕樹・リリウム両名にとっては傍迷惑だった。

お互いリンクスである裕樹とリリウムはそれだけで接点があるが、それは今公おおやけにはできない。

さらに、裕樹はBFF社の製品をよく使用するが、それでは何の接点にもならない。

要するに、他人から見れば接点が無いのに親しい2人、これはどうやっても疑われる。

2人にはいい案を出す時間が必要だった。

「わるいんだけど、本校舎1階総合事務受付って所に案内して欲しいんだけど？」

「いきなりなんだ、と言っても転校生か。」

分かった案内する。俺は斉藤裕樹だ。そっちは？（リリウム、他人の振りだ）

「鳳鈴音よ」

「（了解です、お兄様）リリウム・ウォルコットです」

「じゃあ、付いて来てくれ」

「はいはい」

「わかりました」

即興の設定でこの場を凌ぐ事は危険と判断した裕樹とリリウムはお互いの事を知らぬ存ぜぬで通す事にした。

それはそれで危険な場合もあるが、2人の演技力と鈴の性格、周囲が暗かった事などから特に問題は起きなかった。

「ねえねえ、もしかしくても一夏の事知ってるでしょ？」

「ああ、数人と訓練や模擬戦もしているからな」

「……数人？」

「一組の2人、俺と一夏も含めれば4人だが」

「…………その2人って、もしかしくても女子よね」

「ああ、そりゃ男は2人しかないからな」

「その女子ってどうなのよ？（他の女子と訓練ってどういうことよアイツ〜!）」

「どう、か。今気になっているだろう事に答えれば、

2人とも一夏を狙っているな。で？そっちは知り合いか何かか？」

「まあ、そんな感じ。にしても一夏の奴他の女子と仲良くして〜！

そう言ったきり鈴は下を向いてぶつぶつといい始める。

「（いきなり不機嫌か、俺はなにか悪い事をしたかなリリウム?）」

「（…お兄様はわかっていてやっているのでしょうか？）」

「（事実なんだからしょうがない。）

所で、予定から大幅に遅れたようだが？」

「（お兄様らしいですね。）

IS『アンビエント』の調整が難航していました。

その件について、後日お兄様に協力して頂きたい事があります」

」

「（わかった。明日の放課後に対応する。）

……さあ、2人ともここが総合事務受付だ」

「え、ああ、案内ありがとうございます」

「ありがとうございます」

「なに、困った時はお互い様だ。それじゃあ、あとは頑張れ」

そう言ってスタスタと帰っていく裕樹。

その後、事務窓口で鈴が血管マークを浮かべた笑顔を披露したのは言うまでも無い。

第七話（後書き）

やっとりリウム登場！

色々考えた結果、この辺りが妥当かなと。

それではまた次回。

第八話（前書き）

就職試験が終わって結果が来るまでドキドキのRAGです。
とりあえず試験が終わったという事で一話投稿です。

それでは第八話、お楽しみください。

第八話

クラス代表就任パーティーの翌日。

現在は06・00、のほほんさんは未だ夢の中。

昨日は色々あってシャワーも浴びられなかっただったのでのほほんさんを起こさないように

シャワーを浴びて食堂へ向かう。

「わゝ…裕樹君…なんか色っぽい……」

「しっとり濡れた髪が何ともいえないわゝ……」

…何か聞こえるが無視しておこう。

その後、朝食（朝から焼きそばを出された）を食べ、歯を磨いて教室へ向かう。

「おはよう！……って、誰もいないのか」

暇なので腕時計のメールウィンドウを開いて中身を確認する。

メールは2件、有沢重工社長の有沢隆文とBFF社幹部の王小龍からだ。

まずは有沢の方から――

「久しぶりだな、リンクス。

この度、わが有沢重工はISの武装関連へと事業を拡大する事となった。

試しに君と話していた新しいネクストの武装をISへと置き換えた物を試作した。

試作品は数種類あったが、そのどれもが成功を納めた。

当然、この武装は一般に出回るべきものではない物である事は明確だ。

もちろん、一般向けに発売する物は別で作る。そのための試作でもあった。

私も使ってみたい物ではあるが、それは君に譲ろう。

何せ、ISを使用できて、この武装を満足に使用できるのは君ぐらいだからな。

このメールに添付しておいた。使ってくれ。

追伸 ついでに重砲撃戦パッケージも作っておいた。

君にしか使えない様な代物となったが、使ってやってくれ。

ほうほう、アレを作ったか。
ダウンロード インストール
早速データ取得と量子変換をして置こう。

次は爺の方だな。

【 用件だけ書いておこう。

そちらにリリウムが向かった。

約1週間程遅れた入学となるが、サポートを頼むぞ。

それとアンビエントの最終調整を頼みたい。

報酬は新型PIC制御ソフトだ。これはリリウムに持たせてある。

企業連の最新版だ、と言っても既に安全性等の裏付は取れている。

これでお前のISの性能は更に向上する。報酬としては充分な筈だ。

リリウムのサポートとアンビエントの最終調整、しかと頼んだぞ。

相変わらず、人使いの荒いジジイだ。まあ、リリウムの為だ、やってやろう。

2つのメールに返事を出してメールウィンドウを閉じる。
教室には、まばらに人が集まっているだけ。一夏達はまだ来ていない。

「（暇だな……ダウンロードとインストールの確認をして置こうか）」

ISのステータス確認のウィンドウを開き、ダウンロード状況を確認する。
ウィンドウには、

「 ダウンロード進行率……………100%
 インストール進行率……………0%

 予想所要時間……………09h59m48s
 予想終了時刻……………15h00m00s
 」

と、表示されている。

現物を量子変換するならまだしも、
遠隔地の物を量子変換しながら通信でやり取りしているからかなり
遅くなっている。

ステータスウィンドウを閉じ、また別のウィンドウを引っ張り出す。
ウィンドウには今現在の自分の預貯金や、
所有する財産―現金ないし、それに順ずる物―が表示されている。

「預金額..

・日本..銀行口座.....9,567,800 [円]

・カード..口座.....10,000,000 [円]

所持クレジット.....999,999,999,999,999

9 [c] (表示限界)

その他..

・白金インゴット保管量.....1.0 [t]

・金インゴット保管量.....1.5 [t]

・銀インゴット保管量.....2.5 [t] 「

今見ても、相当溜め込んだものだ。

まあ、当面の生活、パーツ購入に支障は全く無いのでウィンドウを
閉じる。

今の時刻は08..00、そろそろ生徒がやってくる頃だ。

「おはよー！って裕樹か、いつも早いな」

『おはよー!』

一夏と箒、セシリアをはじめとする殆どの女子が一緒に入ってくる。
……いきなり騒がしくなったな。

「ねえねえ織斑君、斉藤君。転校生の噂って聞いた？」

恐らく、鳳鈴音の事だろう。もしかするとリリウムも入ってそうだが。

ともかく、話の腰を折らない様に知らない振りをしよう。

「転校生？ こんな時期に？」

「俺も初耳だな」

「何でも、中国の代表候補生なんだってさ！」

「ふーん」

やはり、代表候補生だったか。

だとすれば使用するISは……中国第三世代型「甲龍^{シエンロン}」か。
たしか近接格闘型のパワータイプ、白式と同じか。

「あら、私の存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら？」

「このクラスに転入してくるわけではないのだろう？ 騒ぐほどの事でもあるまい」

いつの間にか離れた所にいたセシリアと箒が近くに集まっていた。

「どんな奴なんだろうなあ」

「どんな奴か気にしている場合じゃないぞ一夏。専用機を持ったとはいえ、実力は変わってないんだ。クラス対抗戦に向けて訓練もやっていくぞ。」

まあ、俺も私用が増えて他に任せる事も増えてくるだろうが」

「わかってるよ。」

……まあ、やるだけやってみるさ」

一夏と訓練について話している所に女子達が乱入してくる。

「やるだけでは困りますわ！」

一夏さんには勝っていただきませんと！」

「そうだぞ。男たる者、その様な弱気でどうする」

「織斑君が勝つとみんなが幸せだよ！」

ちなみにこのクラス対抗戦、

優勝したクラス全員に学食デザートの半年フリーパスが贈られる。

学食のデザートはこの学園の特殊性によって、かなりクオリティーが高い。

それを半年タダで食べられるとなったら、女子は燃えるだろう。

「それに今の所専用機を持ってるクラス代表って、1組と4組だけだから楽勝だよ！」

いや、その4組の代表に負けそうだがな――
などと考えている時、聞いた覚えのある声が耳に届いた。

「――その情報、古いよ」

ちらと横を見ると、一夏も聞いた覚えのある声のようだ。

「2組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝で
きないから」

「鈴……？ お前、鈴か？」

どうやら一夏もあったことがあるらしい。

反応を見るに、久しぶりの再会、と言った所か。

「そうよ！ 中国代表候補生、鳳鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ！」

「何格好付けてるんだ？ すっげえ似合わねえぞ」

「んなっ……！？ なんて事言うのよ、アンタは！」

済まないが、俺も一夏と同意見だ。

何より、今の喋り方の方が魅力があっというんじゃないか？

……ん？ 鈴の後ろに黒い陰がある。織斑先生か。

「おい」

「なによ！？」

バシンッ！！と聞き返した鈴に出席簿がいい音を奏でる。
そう、さっき話しかけたのは織斑先生だ。

「もうS H Rの時間だ。教室に戻れ」

「ち、千冬さん………」

「織斑先生と呼べ。さっさと教室へ戻れ。
そして入り口を塞ぐな、邪魔だ」

「す、すみません……」

また後で来るからね！逃げないでよ一夏！」

捨て台詞を吐いて2組へ戻っていく鈴。

さっきの反応からに、鈴は織斑先生が苦手なのか。
昔なにかやらかしたのか、素で苦手なのか……まあ、置いておこう――

バシンバシンバシンバシン！！！！

凄まじい音がしたと思ったら一夏や箒達が蹲っている。

ああ、席に着いてないから叩かれたのか、ご愁傷様。

「全員席に付け、早くだ」

ガタガタガタッ！と言う音と共に全員が席に着く。
やはり、出席簿アタックは喰らいたくない様だ。

「では、山田先生」

「はい。」

えーっと、このクラスに新しいお友達がやってきました。
入って来ていいですよ」

「はい」

扉を開けて入って来たのはもちろんリリウムだ。

「リリウム・ウォルコットです。」

本当なら入学式には来る筈だったのですが、諸事情で1週間遅れてしまいました。

皆様、どうかよろしくお願いします」

ペコリとお辞儀をするリリウムに生徒全員が夢中になっている。

まあ、御伽噺の中から出てきたお姫様のような容姿だから仕方ないか。

「自己紹介の中にもあった通り、リリウムさんは1週間遅れで学園に来ています。」

仲間はずれにせず、仲良くしてくださいね」

『は、はいっ！』

少しドモって山田先生に答えるみんな。人の話はどんな状況でも聞いておこう。

「じゃあ、リリウムさんは後ろの空いている席に座ってください」

「わかりました。」

（お兄様、お昼休みに色々教えてください）」

「（わかった）」

アイコンタクト、というかもはや以心伝心の様な感じでやり取りをする。

I Sの通信チャネルを使っている訳じゃないから何も問題は無いだろう。

「それでは——」

おっと、授業が始まるか。

別に聞かなくても理解しているから関係ないが、一応ノートは取っておこう。



時間は流れて今は昼休み。

箒とセシリアが午前中の授業で山田先生に注意5回、
織斑先生に3回出席簿アタックを喰らい、一夏の所為にしていたが、
自業自得だろう。

そんなこんなで食堂まで移動し、一夏は鈴と合流。

こっちもリリウムと合流し、

一緒にテーブルで若干の視線を感じながら食事をしている。

(俺はカルボナーラ、リリウムは鮭の西京焼きの定食を食べている)

「にしても、なんで一週間も遅れたんだ？」

「はい、AMSを使用して機体制御を行うとなぜかPICが停止、
そののちシステムがダウンしてしまうのです。

お兄様にはその問題の解決を行って頂きたいと思っています」

「ああ、それか。確かに調整は難しいだろうな。

アリーナと整備室の使用許可は貰っているから、

放課後に第一整備室まで集合……と言っても一緒に向かう事になるか」

「わかりました。ではその時に制御ソフトをお渡しします。

……気になっていたのですが、『斉藤裕樹』は本名ですか？」

「ああ、本名だ。

出来ればここでは名前で呼んでもらった方がいいか――」

「ねえねえゆうゆう、

なんでリムリムはゆうゆうの事を『お兄様』って呼んでたのかな
」

早速、これに突っ込まれてしまった。

今騒ぎを起こさないようにリリウムに言うておく所だったのに……

「……一応言うておくが、家族じゃないぞ。

腐れ縁と言うか、何と言うか……」

「私が初めて会った時に年上と勘違いしてしまったのが今も続いているのですよ」

「ふうん、そーなんだー。

いいな、私もゆうゆうみたいなお兄さんがほしーなー！」

「いいえ、お兄様は私の物です。

あなたは今の関係で充分でしょう？」

リリウムがイイ笑顔で笑っている。

のほほんさんとリリウムの間で火花が散っているのは俺の錯覚だろ

うか……

「はいはい、俺は物じゃないし、これ以上妹を増やす気はない。それにもうそろそろ食べる事に集中しないと授業に遅れるぞ」

「あはは、それはマズイかな……」

「……お兄様はもう食べ終わっているのですね」

「そりゃあ、麺類だし、時間はちゃんと見てたからな」

「あの……食べるの少し協力してください、お兄様」

「フツ……ああ、いいよりウム。」

「じゃあ、これとこれを食べるよ」

「あの、これも——」

そんな感じで食べ進めていき、3人共無事に授業に間に合った。



また時は流れて放課後。

現在は第一整備室内にいる。

今頃、一夏は箒とセシリアに教えられている事だろう。

こっちは現在、アンビエントの機密保持のため俺とリリウム以外は誰もいない。

そんな状況でも間違いは起こらない。

いや、間違いが起きても問題にはならないのだが…まあ、置いておこう。

今は、有沢重工からのプレゼントの量子変換インストールが終わったのでハスラーワンに新P I C制御ソフトをインストール中。

アンビエントの方はリリウムがアンビエントを展開して俺がプログラムのチェック・修正を行っている。

リリウムは最初は「作業が終わるまでアンビエントに乗っています」と言っていたが、

さすがに時間が掛かるので全身装甲を一部解除、フルスキンそのままアンビエントから抜けるように降りて休憩をしている。

「P I Cの方は…問題無し。A M S自体も…問題無しか。

なら、原因はP I CとA M Sの同調シンクロに異常か？…異常無しか。

んー、アンビエントの回路は…あつた、これだ。

…A 2 3 5からA 2 3 9、P 0 3 5からP 0 4 6の配線パターンがずれてるのか。

確か、ここの回路は素子内のデジタル回路だった筈、これならいけるか」

「お兄様、原因はわかりましたか？」

「ああ、デジタル回路の配線パターンがずれてる。

多分プログラム入力の際に焦って間違えたんだろう。

B F Fもこんな間違いをするんだな」

「何せ、突貫でプログラムを入力したのでそれは仕方ないかと」

「まあ、そこしか間違いが無いのもある意味凄いながな」

話している間にもコンソールを出してプログラムの修正を行う。
ピッピピッピと音が絶える事無く聞こえてくる。

「更にタイピングが早くなりましたか？」

「あゝ、どうだろうな。」

自分じゃイマイチわからないし、リリウムがそう思うんならそう
だと思ろぞ」

「リリウムは、確実に早くなっていると思います。
すぐ終わってしまいそうですね？」

「ああ、回路パターンの修正が終わったら再起動して試験運転。
その後は――っと、修正完了。」

じゃあ、再起動して試験運転をやってくれ」

「了解しました」



皆様こんにちは、リリウム・ウォルコットです。

現在はアンビエントを再起動、第一アリーナへ移動して試験運転の
真っ最中です。

動かそうとすればシステムダウンでまともに試験も出来なかったので

第一アリーナで各種機体データの収集・解析をしています。

「リリウム、調子はどうだ？」

「はい、好調です。」

シュミレータでの訓練はしていましたが、実際の物とは少し違いますね」

「そりゃそうさ、シュミレータで使ってたデータは理論値の物、あくまで目安だ。」

それでも、シュミレータで訓練しておいてよかっただろう？」

「そうですね、AMSを使用していると言ってもシステムの根幹はISのままですから
ネクストと同じ方法で操縦していたら今頃苦勞していたと思います」

「まあ、ネクストを動かした経験があるから一般人よりかは優位に立ってるんだがな。」

っと……リリウム、データの収集が終わったから好きに動いてみてくれ」

「了解しました」

お兄様に雑務をさせるというのも気が引けてしまいますが……
今はISに慣れることが優先ですね。

それにしてもこのアンビエントは凄い機体です。

今まで試験運転も出来ない状況でしたが、

それでもこの機体の性能の高さは伝わってきました。

何度ブーストしても減らないSE、
並みの兵器では傷一つ付かない全身装甲、
実弾型ライフルと同程度のサイズまで纏められたレーザーライフル、
水平線の向こう側までをも探査できる高性能レーダー……
どれをとっても並みのISには引けを取りません。

そんな高性能の機体でも操縦者が……リリウムが弱ければ意味がありません。

この機体の為にも、お兄様の為にも、もっと強くななくては……

「そろそろ時間だ。引き揚げるぞ、リリウム」

「了解です、お兄様」



アリーナと整備室から引き揚げ、シャワールームに入る。

『俺』ではなく『リリウム』がだ。

ちなみにシャワールームはアリーナから歩いて数十秒の所にある。
年頃のお嬢様達のいるIS学園なら当然の処置といえるか。

俺も訓練後に汗をかいたままで生活したくはないからな。

「おまたせしました」

「ん？ずいぶん早かったな。シャワー、もういいのか？」

「はい。それほど汗はかきませんでしたから」

「じゃあ、帰ろうか」

「はい、お兄様」

そのまま寮棟へ向かい、それぞれの部屋に別れる時に騒動は起きた。

「――犬に噛まれて死ねッ！」

バタンッ！

遠くに鈴が走って去っていくのが見えた。

そして勢いよく閉めたドアは、恐らく一夏の部屋。
となると――

「なんだ？ また一夏か？」

「織斑一夏はよく問題を起こすのですか？」

「…まあ、数人との間でな」

「……要注意、でしょうか？」

「いや、巻き込まれさえしなければそこまでじゃないさ」

巻き込まれると……胃が痛くなるか、砂糖を吐きたくなるかだな。

「一応、頭の隅に留めて置きます」

「そうしてくれ。」

……じゃあ、俺の部屋は此処だから」

「了解しました。おやすみなさい、お兄様」

「おやすみ、リリウム」

リリウムと別れ、部屋に入る。

一夏？どうせ自業自得だ。個人的な事は自分でどうにかして貰わないとな。

それにしても、新型PIC制御ソフトと試作武装グレネードはいい出来だな。
流石に、この状況下ではおいそれとプログラムや武装は作れないから
やはり企業連に協力を仰ぐしかないか。

それと、来月のクラス代表対抗戦も不安が残るな。

流石に軍人といふこの間まで一般人だった差は埋めがたいからな。
とりあえず、一夏も織斑先生にイグニッション・ブースト瞬時加速を教わっている様だし……
どの道、このまま放課後訓練は続行か。

「ゆうゆう？難しい顔してどーしたの？」

「ん？ああ、いや、クラス代表対抗戦に向けて考えてたんだ」

「あゝ、おりむゝの訓練かゝ。

うゝん、私からは何も言えないからなゝ」

「まあ、来月になれば嫌でも結果が出るよ。
シャワー使ってもいいかい？」

「うん！もう入ったからだいじょーぶ！」

「ありがと、それじゃあ入る」



「ふう、やっぱり緑茶は落ち着くな」

「あゝ、ゆうゆうゝ、私にもお茶ちょうだい……」

「はいはい……って、どうした？」

風呂上りに緑茶（水出し）を飲んでいると、
ぐでーっとした声ののほほんさんに緑茶を要求された。

「……ああ、勉強してたのか」

「うん、でもココが難しくてさ」

「どれどれ……ああ、ココはこの回路とこの回路を――」

解いていたのはISの勉強……と言うよりは工業高校の電子回路系
の問題だった。

ISも回路がある以上、電気回路が存在する。

そして、ISの操縦から整備までを学ぶIS学園では、
一年生の時点で、つまり操縦者になるか、整備士になるかを決める
以前から

一般教科だけでなく基本的な電気系の事について学ぶのだ。

「おお！すごいゆうゆう！解けちゃったよ！」

「まあ、これでも一夏の家庭教師ですから」

「いやゝ、助かっちゃったよ！」

「ありがとねゝ、ゆうゆうゝ」

「自分でよく考えても分からない様な時は教えてあげるよ」

「うん！頼りにしてるよ！」

「いや、俺を頼る前にしっかりと自分で――」

それから消灯時間になるまでのほほんさんと雑談をして過ごし、明日の準備を済ませてから就寝した。

第八話（後書き）

作者「ハッハアアアッ！

社長と爺（文だけだけど）登場だぜー！っ！！」

裕樹「ああ、やっとだな。そして原作一巻もそろそろ終わりだな」

作者「このまま突っ走るぜエエッ！！」

裕樹「なのはの方も書けよ？」

作者「うっ……」

裕樹「どうした？」

作者「いや、実は一度書いてる途中で小説を

保存してたメモリがエラー起こして全部消えたんだよ。

この第八話も消えた小説の内容を思い出しながら書いてたんだよ。

もちろん、なのはの方も同じで書いてる途中じゃきい勘弁してえや」

IS 裕樹「事情はわかったが……」

なの裕樹「お前何処の人間だよ」

作者「りんごがボケるという県です」

なの裕樹「いや、もうそれ言った方がいいんじゃないか？」

IS 裕樹「だな」

作者「ですよ〜」

なの裕樹「さて、作者も月曜から中間テストだし、この辺で切り上げようか」

IS 裕樹「そうだな」

作者「じゃあ、三人でアレ行きましょうか」

なの・IS 裕樹、作者「次回も！この小説に！

ファイナルフュージョン承認！！」

リリウム「―特殊装甲武装腕部―

これが勝利の鍵、です」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6935t/>

ISーインフィニット・ストラトスー黒い閃光

2011年11月15日02時04分発行